
妖怪の妻になってしまった男

小栗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖怪の妻になってしまった男

【Nコード】

N7696Q

【作者名】

小栗

【あらすじ】

今井はひょんなことから、かわいい子ちゃん妖怪のからだに乗っ取ってしまう。そのまま妖怪の彼の家に連れていかれ、妖怪の妻としての生活がはじまる。なんとか元のからだに戻りたいと頑張るのだが。

1・妖怪ナキータ

今井は名もない古びたお寺や寺院をめぐるのが好きだった。

今日も車をあてもなく走らせていた。

山あいの細い道を進むと、古い鳥居が見えてきた、鎮守があるのだろう。

今井は車を駐め、鳥居につながる古い石段を登っていった。

天気はよく風が気持ちいい、石段を登りきると古い古い祠があった、苔むしていて、かなり痛んでいるが奇麗に掃除されている。

今井はこんな場所が大好きだった。

三方を山に囲まれていて、急な崖の途中に作られたような祠である。

横に岩が置いてあって、岩の正面には『封印』と真つ黒な太い文字で書いてあった。

「なんだろう」

そう思って触ってみた、ちょうど『封印』の文字が隠れてしまう場所を触ってしまった。

岩がぐらつと動いた、動くような岩ではないのに。

一瞬びっくりしたが、それ以上は動かない、岩の下に穴が空いている。

今井はその穴を覗き込んだ。

手が出てきた。そして今井の手をつかんだ。

「ギヤー」

今井は悲鳴をあげ、必死に手を振り切ろうとした、しかし、手はすごい力で今井をつかんで離さない。

穴の中から女が出てきた、赤い不思議な着物のようなものを着ている。

今井は必死で逃げようとしたが逃げられない。

「私は妖怪なの、悪いけど魂をもらっね」

女がにらむと、自分の口から霧のようなものが出てきた、それが、女の口へ入っていく。

意識が薄くなってきた。体の感覚がなくなつて体が宙に浮いたような感じがした。

必死に抵抗した。どこかに吸い込まれていく。吸い込まれてなるものかとがんばった。

「おとなしくしろ」

どこかで女の声がする。

おとなしくなんかできるか

意識が吸い込まれそんな感じがするのを、必死でこらえた。

「おとなしくしろと言つに」

女の声

体の感覚がなく目も見えない、意識が薄くなりそうなのを必死でこらえる。

「いかん、こちらがもたん。おまえ法力を持っているのか」

女の声

封印されていた妖怪にはもう体力が残っていなかった。妖怪は吸い込んだ魂に逆に自分の身体を乗っ取られようとしていた。

「いかん、いかん、私が死んでしまう」

徐々に、吸い込む力が弱くなった。

しかし、体の感覚はない。今井は体の感覚を取り戻そうと必死で頑張る。

「やめろ、やめてくれ。殺さないでくれ」

女の声は悲鳴に近くなった。

しかし、今井はありつたけの意識を集中して頑張る。

「ぎゃー」

女が悲鳴をあげた。

不意に体の感覚が戻ってきた。

目が見える。が、見たものは足元に倒れている自分だった。

「俺が、倒れている」

今井は自分の手を見た。白くて細い手が赤くて長い袖から伸びている。身体を見た、何枚も布を重ねたような奇妙な着物を着ている、赤くてケバケバしい模様が目立つ。さっきの穴の中から出てきた女が着ていたものだ。顔を触ってみる、長い髪が手に触った、長い髪が肩にかかっているのが見える。

自分がさっきの女になってしまった。

これは何なんだろう、あの女の身体を乗っ取ってしまったのか、じゃあ、あの女はどうなったんだろう。さっき聞こえてきた女の声からすると女は死んだのか。

女が出てきた穴を見た、穴の上に大きな岩があって『封印』と真っ黒な文字で書かれているが、その文字の真ん中、さっき今井が手を置いた部分が消えて元の岩肌が見えている。

さっきあの女は自分の事を妖怪と言った。あの女は妖怪なのか。その妖怪がこの穴に封印されていて、それを自分が破ってしまったのだろうか。

ふと、足元に自分が横たわっているのが目に入った。

そう、自分はどうなったんだろう。あわてて、自分の横にしゃがみ込むと自分の顔を触ってみた。息をしている。

「よかった」

眠っているみたいな感じだ。でも、眠っているわけではなくて、自分はいまここにいる。目を覚ましてみようと、揺すったりたたいたりしたが無駄だった。そうだろう、自分は今ここにいるんだから、これで目をさましたら、それはそれで恐ろしい。

身体をねじったような形で倒れているので、まっすぐに伸ばして仰向けに寝せた。自分で自分を介抱するのは変な感じだ。

今井は自分の身体の横に座って、これからどうするか考えていた。乗り移っているのなら、自分の身体に戻らなければならない、でもどうやって。

自分の身体も、このままここに置いておくわけにはいかない、やはり病院か。病院でこんな現象がなんとかなると思えなかったが、まずは救急車を呼ぶ方がいいかもしれない。

今井は自分の身体から携帯電話を取り出して救急車を呼んだ。ふと思い立って、自分の身体から財布とかキーとか必要な物を全部取り出した。このままの状態が続くのなら、この身体で生活しなければならいかもしれない、そのときに必要になる。

救急車が来るまで今井は自分の身体の横に座ってじっと待っていた。

何気なく顔を触ってみた。痩せた感じの顔だ。俺はどんな顔をしているんだろう、さっき妖怪に襲われた時は顔など見ていなかった。車にミラーが付いているのを思い出して車のところへ行った。

ミラーで自分の顔を覗いてみると、そこにはすごい美人が写っていた。整ったほっそりした顔はものすごくかわいい、妖艶な感じでうっとりとして見とれてしまう。自分がこんなにかわいいなんて嬉しくなる。いつまで見ていても飽きない。

ただ、着ているものはちょっとひどかった、着物に似ているがふんわりと広がっておりスカートのように感じた。色は薄い赤でその上にどぎつい真っ赤で大きな柄がある。

救急車が来た。

今井は救急隊員を自分の身体が倒れている所に案内した。救急隊員はテキパキと動く。今井はすべて本当の事を説明した。しかし、救急隊員は今井の言う事を信じない。

「あなたが襲ったんですね？」

「いえ、妖怪の時のわたしです」

救急隊員はよく分からんと言うように頭をかく。

「あなたが襲ったからこの人は気を失って倒れたんですね」

「たぶん、わたしがこっちに移ったからだと思います」

「乗り移った？」

彼らはまったく信用してくれなかった。あまりにも常識がある人はこのような話は絶対に受け入れられないのだろう。

「ともかく病院へ運びましょう」

彼らは今井の身体を担架に載せると救急車に運んだ。

「搬入先の病院はこちらに電話してもらえばわかります」

救急隊員は今井に連絡先を説明してくれた。

救急車は行ってしまった。

救急車が行ってしまうとあたりは元の静けさを取り戻した。

これから、どうしよう。この身体で暮らさなきゃならないのか、何とか元に戻る方法を探さなくちゃならない。

さっきの『封印』の岩の所に行ってみた、妖怪女が入っていた穴がある。中に入ってみた。中は狭く人が立てないくらいの高さで畳1枚くらいの広さだ。紙屑みたいなものが散らばっているがこれといって何も無い。

今井は穴から出た。まわりをふらふら歩いてみる。

「ナキータ」

不意に空から声がした。声がする方を見上げると何か浮かんでいる、人の形に見えた。

その人の形の物はぐんぐん今井の方へ降りてくる。そして、あつと言つ間に今井の前に降り立った。

それは人間だった。背が高くがっしりした男で、これまた不思議な着物のような物を着ている。

もう何があっても驚かないが、やはりビククリして数歩下がった。

「ナキータ、封印を破ったのか」

彼はうれしそうに今井の肩を掴む。

「よかった」

彼は今井をグツと引き寄せた、今井はこの男に抱かれたしまった。

あまりに思いがけない出来事に逃げる事さえ思いつかなかった。

「君が封印されてから、毎日来てたんだ」

彼はこの妖怪女の知り合いなのか、ナキータと呼んでいるからこの妖怪女の名前はナキータらしい。彼はいとおしそうにナキータの髪をなでる。そしてじつとナキータの目を見つめていた。彼の顔が近づいてきて、キスされてしまった。

今井はすぐんでしまつて動くことができなかった。ナキータの目に恐怖の色を見つけ男の顔が変わつた。

「どうしたんだ？」

自分はこの妖怪女ではない事を説明しなければ。そう、思ったが、恐ろしい考えが頭に浮かんた。ナキータは死んだのだ。その事をこの男に説明したらどうなるだろう。確実に殺される。今井は恐怖で何も言えなかつた。

「どうしたんだよ、俺だよ」

彼はナキータの手を持つた。

「俺のこと、覚えていないのか？」

今井は思わずうなづいた。

「覚えていない、わすれたのか？」

もう一度うなづく。これがいい、記憶を失つたことにしよう。

「何を覚えている？」

「何も思い出せない」

今井は小さな声で言つた。

「記憶をなくしたのか」

彼はびっくりしたように今井の目を見ている。

「俺の事とか、家の事とか何か覚えているか？」

「なにも覚えていない」

今井はやつと答えた。

彼はナキータの髪をなでた。

「そつだよな、3年間も封じ込められていたんだもんな、辛かつたよな。もう大丈夫だ、俺がついてる、何も心配しなくていい」

彼の目はうるんでいた。よほどナキータが好きなのだ。

「閉じ込められている間に、記憶をなくしたんだな。辛い生活だったんだな」

彼はナキータを抱きしめた。

「さあ、帰ろう」

彼は今井の手をつかんで浮き上がった。手を引つ張られて、ナキータは少し浮き上がったが手がすべってどすんと落ちてひっくり返った。

彼はあわてて、ナキータの横に降りてきた。

「どうして飛ばないんだよ」

「私、飛べるんですか？」

「そうか、飛び方も覚えていないのか」

彼はナキータを軽々と抱き上げ、そしてそのまま飛び上がった。どんどん高く登っていく、怖いので思わず彼にしがみついてしまった。ナキータが彼に抱きついてるので、彼はうれしそうだ。どんどん飛んでいく。この妖怪男にどこかに連れて行かれる。彼が行ってしまうまでの辛抱と思っていたが、とんでもないことになってしまった。

「君に会いたかった、毎日、君の所に行っていたんだよ」

男はしゃべりはじめたが風の音でよく聞こえないから返事しなくても不自然ではなかった。

この男も妖怪なのか、どこへ連れていくつもりなのだろう。今井は元の身体に戻るところか逃げることもできないような所へ連れていかれつつあった。

2・妖怪の妻

妖怪男は今井のナキータを抱き、野山を越えてかなりの低空を飛ぶ。速度が上がったのか風の音がすごい、だから妖怪男も黙っている。飛びながら見える景色はおもしろかった。山を低空で飛び越えると平地が眼前に広がる。川が流れていて橋が架かっている。

突然景色が変わった。いきなり雪が積もった険しい山々が広げる所へ出た。そこは日本とは思えないような所だった。空中にトンネルのようなものがあってそこを通過したような感じた。

今井は景色を覚えた、もし、ここから逃げるときはここへ戻ってこなければならぬ。逃げる事が出来ればの話だが。

青空に広がる山々の景色は息を飲むほど美しい。気温が急に下がって当たる風が冷たい。あちらこちらの山の中腹に赤い家が建っている。どの家もものすごい急斜面に建っている。

やがて、そんな家の中の一軒が近づいてきた。

家の正面には広いテラスがある、彼はそのテラスに降り立った。

いよいよ妖怪世界のど真ん中に来てしまった、もう、記憶喪失のナキータを演じるしか道はなかった。

「さあ、ついた、ここが僕達の家だよ」

この家は断崖絶壁の中腹に張り付くように建っている。テラスもかなり恐ろしい所で、まず周囲に手すりがない、板が敷いてあるが隙間が広い所があつてそこから下の断崖が見える。

妖怪男は抱いていたナキータを下ろした。足元の近くにある隙間は人が入るくらい広い、落ちたら終わりだ。

彼はナキータの肩を抱いて歩き出した。今井は彼に引かれて歩く板の隙間はデザインでこうなっているみたいで一定間隔にある。なんでこんな危険な構造になっているのだろう。

「ここの家は、覚えているかい？」

彼がナキータをみる。

「いいえ」

今井は小さな声で言った。声が出たのが不思議なくらいだった。テラスの先は玄関になっていた。大きな扉があつて、妖怪男はその扉を開けて中に入った。

中は広い、天井が高く、大きな窓がある。男の人がいて妖怪男を迎えた。中年の男性で背が高い。彼も妖怪なのだろうか。

妖怪男はナキータの肩を抱いたまま、どんどん奥へ入っていく。やがて、こじんまりした居間のような部屋に入った。大きなソファのような椅子が向かい合つて置いてあり、椅子が幾つかある。窓があつて綺麗な山が見えている。

「さあ、ゆつくりして」

彼はソファのような長椅子に座つた。身体を背もたれに倒して身体を伸ばした。

彼から一番離れた所に椅子があつた。今井はその椅子に浅く腰を下ろした。

「3年間、長かった、もう君は死んだと思つていた、よかった、本当によかった」

彼は嬉しそうだ。

「君も3年間辛かつただろうな、本当によくがんばつたよ」

今井はここちよになつて妖怪男を見つめていた。どう動いたらいいのかまつたくわからない、ナキータになりすますなんて不可能に思えた。

彼はナキータが固くなつていゝのを見て、

「こつちへこいよ」と手招きをする。

あまりよそよそしいのも変だ。今井はそつと立ち上がると彼の横に少し離れて座つた。

彼はナキータの腰へ手を回す、そしてぐつと引き寄せた、今井は彼にぴつたりひつついてしまった。

「ナキータ、もうなにも心配しなくていい、ここはおまえの家だ」
彼は喜んでいるナキータを期待している。それに合わせないとま

ずい。今井はひきつった笑顔で彼を見た。

「こわがっているのか？」

今井は思わずくくんとうなずいてしまった。

「そうか、記憶がないから、ここが始めての場所に感じるんだな。それに俺のことも」

彼は座り直した。

「俺は、ゾージャ、君の夫だ」

彼はナキータの夫だったのか、それでナキータをこの家に連れて帰ってきたんだ。

「俺たち結婚してるんだ、使用人が3人いる」

使用人がいるのか、妖怪も人間のような社会なのだろうか。

今井は恐怖で固くなっていたが、しかし、その恐怖でも我慢できないことがあった。猛烈にお腹が空いているのだ。ナキータは封じ込められた3年間にも食べていないらしい。最初は空腹を感じなかったがナキータの身体になれてくると空腹を感じ始めた。しかも空腹などという生易しいものではなかった。ゾージャはやさしそうな妖怪なので思い切って言うてみた。

「あの、ゾージャ、なにか食べたいんだけど」

今井は始めて自分から喋った、もちろん、ナキータを演じなければいけないので、女の話し方で話した。

「わかった、すぐに準備させる、まってて」

ゾージャは部屋から出ていった。

彼がいなくなると、緊張がすこし緩んだ。ごちごちになっていた身体を少し動かす。これからどうなるのかまったくわからない。死刑台の上に立って板が落ちるのを待っている気分だ。ミスをしてナキータじゃないことがバレてしまったら、そこで殺される。

ゾージャはすぐに戻ってきた。手に果物が入ったかごを持ってる。

「少し待ってて、すぐできるから、それまで、これでも食べて」

今井は彼がまだ手に持っているかごからりんごを取るとかぶりつ

いた、目がくらむほどお腹が空いていた。

ゾージャの事も忘れて夢中で食べた。あつと言う間に全部食べてしまった。

お腹が膨らむと少し落ち着いた。やっと笑顔でゾージャを見上げた。

「わらったね」

ゾージャはうれしそうだ。

「おいしかった」

今井は自分でも驚くほど普通に喋れた。

「もつと持ってこようか」

まだ、いくらでも食べれそうだったが、何かするとそれだけミスをする危険も増える。危険そうな事は先へ伸ばそう。

「いえ、準備ができるまで待つわ」

女の話し方と想っている話し方で言ってみた。声が女の声なので違和感を感じない。ただ女って普通どう話しているんだろう。少し違うような気もする。

「3年たっても君は変わっていない、かわいい」

ゾージャはナキータの髪をなで始めた。

彼が腰をずらしてナキータの横にぴったりと座った。逃げるわけにもいかない。

彼はナキータの肩に手を回して引き寄せる。今井はゾージャにぴたりと寄り添ってしまった。

脂汗が出てきた。

「君が戻ってきてよかった、この日をどんなに待ったことか」

彼はナキータの髪にキスをする。今井はじつと耐えていた。

「君がいない3年間は寂しかった。毎日会いに行っただ。でも、君の方が辛かったよな。あんな狭いところに封印されて」

彼はナキータの髪に自分の顔を埋めた。

「もう大丈夫だよ、これからはここで今まで通りの生活が始まる」
突然、

「失礼します」

部屋の外から声がした。

ゾージャがナキータを離した。

女性が入ってきた、おっとりとした感じの太ったおばさんだ。

「簡単なものですけど、食事の準備ができました」

使用人なのか、ともかく、これで窮地を脱出できた。

ゾージャの後について廊下を進む。後ろからはさっきのおばさんがついて来る。廊下を曲がった先の部屋に入った。そこは大きな部屋で天井が高い。部屋の端にテーブルがあった。

ゾージャはテーブルに行くとナキータに座れと手で合図した。テーブルの上には数品の料理が置いてあった。見たところ普通の料理に見えた。

今井が座ると、ゾージャは反対側の席に座った。

先ほどの女性がグラスに何かをついだ、多分お酒だ。

料理は目の前にあるが食べ始めていいのかわからない。

ゾージャを見ると彼はお酒を飲み始めた。

「食べてもいいですか？」

聞いてみた。

彼はびっくりしたように。

「もちろん、さあ食べて」

箸が置いてあるので箸で食べ始めた。料理は普通に食べることができる。何の料理が分からないがおいしい。

ふと見るとゾージャがじっとこっちを見ている。俺が何か変な事をしているのかもしれない、妖怪の食事の習慣なんて分かるはずがない。

もう一度ゾージャを見てみた。やっぱり食い入るように見ている。

「あの・・・なにか変ですか？」

聞いてみた。

「君を見るのは3年ぶりだろ、いつまでも見ていたんだ」

そういう事なのか、ちょっとホットする。ナキータはかわいいし、ずっと見ていたい気持ちも分かる。

しかし、目が上げられない。目を上げるとゾージャと目が合ってしまう。ゾージャに見られてると思うと動きがぎこちなくなってお箸で料理がうまくつかめない。

「あの・・・あまり見つめないでください」

今井が言うと、ゾージャはにやっとわらった。

「今日の君はかわいいなあ。君がこんなに初々しく感じたことはないよ」

わざとやっている訳ではない、おどおどしているところが初々しく見えるのだろう。

ゾージャはお酒を飲んでいたが。

「酒でも飲んだらどうだ、落ち着くぞ」

今井はお酒は飲めなかった。それに酒には酒ならではの習慣があることが多い。お酒はやめといった方がよさそうだ。今井はお酒に手を出さなかった。

「どうした、好きだろう」

今井はゾージャを見た、彼はやさしそうな顔でナキータをい見ている。

お酒に手を出さないわけにもいかないみたいだ。お酒をちょっと飲んでみた。かなり強い酒だ。

グラスを置こうとすると。

「なに、気取ってんだ。ぐいっと飲んじゃえよ」

もう一度グラスを手を取って、ぐいっと飲んでみた。むせて咳をしてしまった。咳き込みながらグラスを置いた。

「君が酒にてこずるなんて、始めて見た」

ゾージャはおもしろそうにナキータを見ている。ただ、疑っているわけではなさそうだ。

ふと見ると足を開いて座っていた。まずい、あわてて足を閉じた。今の今までまったく気にしてなかった。ここはテーブルがあるから

ゾージャから見えないが、さつきゾージャといた時おかしく思われたかもしれない。

急にあちこち気になってきた、今着ている着物はボタンではなく紐で結ぶようになっていて、だから着こなしが難しい。かなり胸がはだけていて、胸のふくらみが見えている。ゾージャが見ていたのはこれかもしれない。あわてて、襟を引き寄せた。

「俺たち結婚してるんだから、そんなこと気にするなよ」

「やっぱり、みっともないなと思って」

自然に言葉が出てきた。ちゃんと女性らしく話せた。

髪のを触ってみた。指が髪を通らない。

「髪はひどいな、あとでミリーに梳かしてもらえばいい」

「ミリーって？」

一度話せるようになって、どんどん言葉が出てくる。

「君の侍女、君がいない間もずっとここにいるんだ」

「わたしに侍女がいるの？」

明るく振る舞った方がいいと今井は思った。あまり怖がっていると返って変に思われる。

「そうなんだ、なかなか気の利く娘だよ」

侍女がいるなんてたいしたもんだ。

「ゾージャはお金持ちなんだね」

「まあね」

ゾージャも嬉しそうだ。

今井はゾージャとそれらしい会話が出きるようになったので気持ちがいふんと楽になった。余裕が出てきて部屋の中見渡した。壁の途中に扉があった、なんであんなに高い所に扉があるんだろう。

「あの、扉はなんなの？」

「あそこから寝室に行ける」

ゾージャは普通に答えた、どこも不思議とは思っていないようだ。「なぜ、あんな高い所に扉があるの？」

ゾージャは首をひねった。

「だって2階に行ける扉が必要だろ、あそこに扉がなかったらどうやって2階に行くんだ」

「階段・・・」

と言いかけて、はっと口をつぐんだ。彼らは空が飛べるのだから階段など必要ない。あそこまで空中を飛んで、あの扉から2階に行くのだ。

さらに恐ろしい考えが頭に浮かんだ。という事は、この家には階段がないのかもしれない。

とんでもない所に来てしまった。ここでは1人で寝室に行くこともできない。

ゾージャはナキータが何を考えているか分かったみたいだ。彼は扉を見上げた。

「飯が終わったら飛び方の練習をしよう、飛べないと便所にも行けないぞ」

「練習？」

今のゾージャの言葉は衝撃的だった。俺が飛べるのだろうか。確かにナキータの身体なんだから、ナキータが飛べるのなら、飛べるかもしれない。

「お願いします」

思わず言葉に力が入った、空が飛べるのなら飛んでみたい、今井は始めてここの生活が楽しそうだと感じた。

食事を続けた。料理はどれもおいしいものばかりだった。

ゾージャは酒を飲みながらナキータを見ている。

今井は次第になれてきた、色々知りたいことがたくさんあった。

「私、歳はいくつなんですか？」

「君は28、俺は31だ、結婚したのは10年前」

「じゃあ、わたし、18で結婚したんですか」

できるだけ明るく話した。

「18の時の君はかわいかった、この世のものとは思えなかった」

今でもこれだけかわいいんだから18の時のナキータはかわいかっただろうな、今井は思わず笑顔になった。

「笑うと、かわいいよ」

ゾージャもうれしそうだ。

「私、誰に封印されたんですか？」

調子に乗って次の質問をした。これがまずかった。

「人間の法力使いにだよ、君は人間の魂を食べに行つて、待ち構えていた法力使いに捕まり封印されたんだ」

「法力使い？」

何だろ？人間の見方なのか。

「妖怪は法力にはかなわないんだ、なあ、もう人間の魂を食べるのはやめてくれないか」

急にゾージャの口調は厳しくなった。

食べるもなにもそんな恐ろしい事できるわけがない。

「はい」

おとなしく答えた。法力使いとは何か知りたかったが聞けそうもない。

ゾージャは不信そうな目で見ている。

「今度のことで懲りただろう、決して食べるなよ」

かなりきつい口調で言う。

「はい、食べません」

ゾージャが急に怖くなったので、今井は緊張した。

この話題はまずかったかもしれない、さっきまでの和やかな雰囲気が一気になくなってしまった。

「君はいままで何度もやめると言つてやめなかった、いいか、今度食つたら俺が殺すぞ」

ほとんど怒鳴る感じでゾージャが言う。

「はい、絶対にたべません」

怒られているので、今井は箸を置いて、きちんと背筋を伸ばし恭順の表情でゾージャを見て言った。ともかく従順にしているしか

い。ナキータはまったく信用がないみたいだ。

「口先だけじゃないのか」

「いえ、本心です」

「今日はいやに、すなおだな・・・、もう食べるんじゃないぞ」

「はい」

ゾージャは妙な顔をしている。

不審に思っているみたいだ。素直すぎたのかもしれない。本物のナキータはこんなに素直じゃないんだろう。

「君は変わったな、昔の君とは別人みたいだ」

怪しんでいる。本人を知らないんだから真似することが元々無理だったのだ。

「記憶がないからどうしたらいいかわからなくて・・・」

記憶がないことを理由にして、なんとかごまかしてみる。

「今の方がいいな、素直だし」

しかし、むしろゾージャは嬉しそうだ。

「今の君の方が、初々しくて素直でだんぜんいいな」

ゾージャはにこにこしてナキータを見ている。

これは、今井にとって好都合だった。記憶がなくて、しかも、元のナキータと性格の違うナキータがいいと言っているのだ。つまり偽者とバレる心配がなくなると言うことだ。

ゾージャが気に入るようにいくらでも従順でかわいいナキータを演じてみせる。今井はそう思った。

「よかった、ゾージャが気に入って」

本心だった。

しかし、ゾージャの話し方が急に変わった。

「あの、俺、今の君の方がいいと思うんだ」

話しくそうだ。

「俺たちの結婚も10年だろ、君の記憶がないと、こつも初々しいかと思うと」

彼は頭を掻いた。

「いや、決して君の記憶がない方がいいと言ってるんじゃないんだ」
ゾージャがなにが言いたいのかわからない。

「あの、実は、あす君を医者者の所へ連れて行こうと思っているんだ」
医者！、妖怪にも医者がいるのか。

「しかし、医者に行っても、記憶が戻るとは限らない」
ゾージャは言いにくそうにしている。

しかし、今井は医者が気になった。医者が診ればナキータの身体を人間が乗っ取っていることが分かってしまうかもしれない。医者に行くのはまずい。

「それで、君さえよければ医者に行くのをよそうかと思うんだ」

彼は汗をかいている。やっと彼が言いたいことがわかった。ナキータの記憶が戻るのがいやなので医者に連れて行きたくないのだ。でも医者に連れていかないことで罪悪感を感じている。好都合だ。

「私はいいよ、あんまり医者には行きたくない」

ゾージャが嬉しそうにわらった。

「じゃあ、行かなくていい？」

「うん、いいよ」

不思議な同意がゾージャとの間でできた。

今井はもともと図太い性格だった。子供のころみんなが怖がってやらなかった事を平気でやって大怪我をしてことがあった。その図太さで、ナキータのふりをするのも平気になってきた。

3・妖術

食事が終わると、妖術の練習を始めた。

妖怪も子供のころは妖術が使えず、親に教えてもらうことによって使えるようになるらしい。

基本的な妖術は教えてもらうことによって誰でもできるようになるが、特殊な妖術は個人差が大きく元々持っている妖力に大きく依存するそうだ。もともとその妖力がなければどんなに練習しても使えるようにはならない。

妖術は精神集中の仕方であるんな術が使えるようになる。妖術を学ぶとはこの精神集中の仕方を教わることになる。

「精神を集中するんだ、宙に浮いている所をイメージする」

ゾージャは宙に浮いてみせてくれた。

「やってみろ」

精神を集中してイメージしてみるが浮き上がらない。

「目は右上を見る感じ、でお腹に重い石を抱えて、足を少し曲げた感じでやってみて」

ゾージャは精神の持ち様を言葉で説明する。

今井がナキータが右上を見ると。

「いや、実際に右上を見るんじゃない、気持ちの持ち方、さあやってみて」

この説明はものすごく分かりにくい、

「どうすればいいのか、ぜんぜんわかりません」

「だから、感覚だよ、頭でイメージするんだ」

やってみるがうまくいかない。

「手を少し曲げてみて」

ゾージャはナキータの腕を持って少し曲げる。

「お腹の石はかなり重いやつ、そうこの机くらい、で左上を見て」
「えっ、右上じゃないの？」

「いや、左上だよ、そういったる」

「さつきは右上と言ったよ」

ゾー ज्याの説明は毎回微妙に違う。

「それで、体を少し前かがみで」

妙な姿勢になった、からかわれているのかもしれない。

「ゾー ज्या、からだの形ってそんなに微妙なの？」

「ああ、大事なんだ。それで、足はもう少し開いて」

言われたとおりにする。

「それで、石を抱えている感覚で、さあ、やってみて」

やってみると、足が床からすうと離れた。

「浮いた」

今井は思わず叫んだ。

「できた、できた」

今井はゾー ज्याを見た。彼もうれしそうだ。彼の指導は、あなたがデタラメではなかったみたいだ。

一旦浮き上がれるようになると、飛ぶのは簡単だった、宙を移動してみる。そう思うだけで思う所に移動できる。

ちょうど水中を泳ぐような感じでテーブルの下をぬけてみた。天井まで登って天井に腹ばいになって天井板をたたく。

ゾー ज्याが横に飛んできて一緒に天井に腹ばいになった。ナキータが天井をたたくとゾー ज्याもたたく。二人で大笑いになった。

今井はうれしくてたまらない。部屋の中を飛び回るとゾー ज्याがそれを追いかけた。

食堂を飛び出して家中を飛び回りながら鬼ごっこが始まった。ナキータは台所、広間などを笑いながら逃げまわった。ゾー ज्याが追いかけてくるがきわどいところでかわして逃げる。納戸の天井で逃げ場がなくなってゾー ज्याに捕まった。

ゾー ज्याはナキータを捕まえるとぐつと抱きしめた。そしてキスをした。

今井も、そんなに嫌がってはいられない。毒食らわば皿までだ。

今井はゾー ज्याにキスを返した。

ゾー ज्याはナキータを抱きしめたまま二人は宙に浮いていた。

彼はナキータの目を見つめている。

「ナキータ好きだ」

彼はキスをした。いつまでたつてもキスをやめない。手はナキータの体をさわり始めた。来るべきがきた。我慢しなければならない。ゾー ज्याは唇や耳にはげしくキスをする。男にキスされるのはやはり気持ち悪い。今井は我慢してじっと耐えていた。

ふとゾー ज्याを見ると彼はナキータの目をじっと見ている。

彼はナキータを抱きしめていた手を緩めた。

「俺を警戒しているのか？」

今井の困惑の気持ちちがナキータの目に出ていたのだ。

「いえ、あの、何も覚えていないから、いきなりこうなっちゃうと・

・・」

彼はしばらく黙っていたがナキータを抱いて床に降りた。

「そうだろうな、わかった。君がもっと慣れるまで、待つよ」

ゾー ज्याはやさしい男だ。待つてくれた。

幸いなことに、ナキータの部屋があった。

今井は自分の部屋に入った。一人になると、やっと演技から開放され、疲れがどつと出てきた。しかし、とりあえずここで生活していくめどがついた。空も飛べるし、そこそこ楽しめるかもしれない。落ち着いて部屋を見てみた。広い部屋で家具がたくさん置いてある。ガラス戸があつてその外はテラスになっていた。

テラスに出てみた。

すばらしい景色だ。山々が夕日を浴びて赤く染まっている。

テラスには手すりがない。テラスの端に立って下を見ると断崖になつていて足がすくむ。ここに手すりがなく板の隙間も広いのは彼らが空が飛べるからだ。彼らには落ちるという概念がないのだ。

山々には転々と赤い家が建っている。ここみたいな妖怪の家らし

い。彼らは空が飛べるので平地に密集して住む必要がないのだ。だから景色がいい山の上に住んでいるのだろう。

すつと浮き上がって家から離れてみた。テラスを越えると足元に断崖が広がる。思わず身がすくむ。空が飛べるという理性とは別の所で高さに恐怖を感じる。離れるにつれて家の全体が見えてきた。急な山の斜面に家が建っている。よく落ちないなと思うような場所だ。家は奥行きが少なく、正面にたくさん部屋のあつて、すべての部屋から景色が見えるようになっていた。

今井は部屋に戻ってきた。大きなベットが置いてある。人が5人は寝れそうな大きなベットだ。横には鏡台があつたので、前に座ってみた。

始めて等身大で自分の姿を見た。信じられないくらいかわいい。あどけないところがあつて年齢よりはるかに若く見える。10代と言つてもいいくらいだ。その一方で妖艶な色気がある。あどけない目をしているのだが鋭い所がある。

微笑んでみた。鏡の中のナキータが今井に微笑む。微笑んだ顔はまた格別にかわいい。

今度は鋭い目で見つめてみた。鏡の中のナキータが今井を鋭く見つめている。鋭い顔もまたかわいい。

いつまでやっていても飽きない。今井は28才で彼女はいない、こんなかわいい娘に微笑みかけられたことなどない。でも、彼女はいくらでも好きなだけ微笑んでくれる。

「失礼します」

今井があほなことをやっていると、廊下の方から声がした。

扉が開いて、女性が入ってきた。清楚な感じのするすらつとした美人だ。

「ナキータ様、お帰りなさい」

「どなた？」

「私は侍女のミリーといいます、ナキータ様のお世話をいたします」
彼女はにっこり微笑む。

さつきゾー ज्याが言っていた侍女だ。彼女は理知的でその目からは強い性格を感じた。少しおっとりした所があるゾー ज्याと比べて彼女の方がだますのは難しそうだ。すぐにナキータでないと見破ってしまうかもしれない。今井は緊張した。

「あの、ナキータです、よろしく願います」

自然と丁寧な挨拶になってしまった。

「いえ、私は侍女ですから、そのように丁寧にされなくてもいいですよ、それに、ナキータ様が封印される前からお仕えしていますから、存じ上げています」

「すみません、なにも覚えていないんです」

「お着替えされませんか？」

ミリーは聞く。

「着替える・・・なんと着替えるんですか？」

「失礼ですけど、その着物かなりすりきれています」

自分の着ている着物を見てみた。確かにこれを3年着ていたはずだ。袖を見るとすりきれてぼろぼろになっている。

「ああ、じゃあ、そうしよう」

話し方が難しい、相手は使用人だから少しいばった感じで、しかも女の話し方で話す。

ミリーは扉を開けてどこかに入っていく。彼女について入ってみるとそこは納戸だった。

たくさん着物が着物掛けに掛けられて置いてある。ものすごい量だ。

「どうです、これ、全部ナキータ様のお着物ですよ」

ミリーはさぞナキータが喜ぶだろうと思って言う。

今井はまわりを見回した。女ならこれだけ着る物があつたら嬉しいのだろうが、今井はまったく興味がなかった。

「どれになさいます」

着るもの選びが一番楽しいといった雰囲気でもミリーが手を広げた。しかし、こんなにあると選ぶのは大変だ。

「ミリーはどれがいいと思う」

「では、これなんかいかがですか」

ミリーは落ち着いた柄の着物を取り出した。悪くない。いい柄だ。
「ああ、では、それで」

今井はミリーが指示する通りに動くことにした。その方が無難だ。
なにか聞かれた時も逆にミリーに聞き返してミリーの言う通りにすればいい。

着替えが始まった。ミリーにどんどん脱がされていく。

携帯電話とか財布はナキータが持っていた袋に入れて首から下げ
てある。これだけは自分で外してベツトに置いた。

全部脱がされて素っ裸になってしまった。ナキータの裸が見える。
なんかはずかしいようなうれしいような気分だ。ナキータはすばら
しい身体をしている。胸も大きかった。

次は着なければならぬが、妖怪の着物は紐がたくさんあつてど
う着ればいいのかわからない。まるで子供のようにミリーに着せて
もらった。

「はい、完成です」

ミリーはナキータを鏡の前に連れていく。

鏡に写ったナキータはそれはかわいかった、着物がよく似合う。

この着物は帯や紐を使つて着るのだが、日本の着物とかなり違う。
ふつくらとした感じになっていて長い袖がある。

今井は袖を振つてみた、鏡に写るナキータの袖がかわいく動く。

こんなかわいい着物が着れるなんて女も悪くない。今井は始めて
自分を着飾る楽しさがわかってきた。

うれしそうなナキータを見て、ミリーも笑顔を見せた。

「お記憶がなくて、さぞ不安だと思います。わからないことは何で
も私にお尋ねください」

なんと答えたらいいか分からない。

「ありがとう」

と言ってみたが、どこかピント外れだ。

「私はナキータ様がゾージャ様と結婚された時からお仕えしています。だから、私には何を話されても大丈夫ですよ」

ミリーはナキータが必要以上に緊張しているのを感じ取ったのかもしれない。

しかし、これにもなんと答えたらいいか分からない。

「ありがとう」

と言ってしまった。間の抜けた返事になってしまった。

「もう、人間界には行かれない方がいいと思います」

お茶の準備をしながらミリーが言う。

人間界とは今まで今井が住んでいた普通の世界のことらしい。だいたい、ここは何なんだろう地球上のどこかなのか、それともぜんぜん違う所なのだろうか。ここは何なのか聞きたかったが、彼らからすればここが普通の世界だろうから、逆に聞いた方がいい。

「人間界って、私が封印されていた所のこと？」

「そうですよ、怖い世界です」

怖いとはどんな認識なのかわからないが、それは置いて。

「人間界って、ここと何が違うの？」

ミリーは説明のためにちよっと考えた。

「もちろん人間が住んでいる世界です。人間界は自然に出来た世界です。はるか昔から人間や妖怪が生まれる前からある世界なんですよ」

これで説明は終りと言うようにミリーはナキータを見た。

これでは肝心の、この世界のことがわからない。

「ここは違うの？」

「ここは私たちが結界で作った世界です。昔は私たちも人間界に住んでいたんですよ。それが結界世界を作って私たちはここに住むようになったんです」

なるほど、すごい話だ。自分たちで自分たちの世界を作ってそこ

に住む。自分たちで作った世界なら公害も自然破壊もなにも心配ない。

ミリーはかいがいしく世話を焼いてくれる。今井は1人になりたかったがミリーはなかなか部屋から出ていかない。

小さなテーブルがあつて、今井はそこに座つてミリーが入れてくれたお茶を飲んでいた。

ここからは窓の外が綺麗に見える。夕暮れの山々がまだ明かりが残っている空を背景にそそり立っている。

「暗くなってきましたね、明かりを点けましょうか？」

明かり、ここに電気があるのだろうか。

「ええ」

今井が答えると、ミリーが手を動した。すると天井全体が明るくなった。電気の照明とちよつと違う感じだ。

「どうやっているの？」

「発光の妖術です」

ここはなんでも妖術で出来てしまうらしい。

明るくはなったが、やはりミリーはナキータの横にじつと立っている。

「お菓子でもお持ちしましょうか？」

ミリーが聞く。

「いえ、いいわ」

今井は1人になりたかった。もう緊張は限界に来ていた。しかし、ミリーはナキータの横にじつと立っている。

ナキータから下がるように指示しないとミリーが自分から出て行くわけにはいかないのかもしれない。

「あの、ちよつと疲れたんですが」

言い方が難しい、今井は意味不明のことを言った。

しかし、ミリーはすぐに意味がわかった。

「お一人になりたいんですね」

ミリーは頭を下げると扉から出て行きかけたが、ふと立ち止ま
て。

「私が邪魔な場合は遠慮なくそうおっしゃて下さい。私は侍女です。
遠慮なんかないありません」

そう言っ て彼女は扉を閉めた。

やっと1人になれた。

ベットの上に横になった。緊張から開放されて身体の筋肉が緩ん
だ。

これからの事を考えていたが、いつの間にか眠ってしまった。

4・妖怪の生活

次の日の朝、目を覚ますと、今どこにいるのか思い出すのにしばらく時間がかかった。

昨夜は布団の上に横向きに眠ったはずだが、ちゃんと布団の中に寝ていて着ているものも一番上のかさばるものは脱がしてあった。

ベットの横は窓で、窓からは綺麗な山々が見える。

今井はベットから降りて、テラスに出てみた、冷たい風が気持ちいい。

朝日がテラスに当たっている。ここが人工の世界だなんて信じられない。日の当たる所まで行ってみると確かにぬくもりを感じる。この太陽も作り物なんだろうか。空は高く白い雲が浮かんでいる。部屋にもどるとミリーが来ていた。

「おはようございます」

ミリーはお茶の準備をしている。

「昨日、寝かしてくれたのはあなた？」

「はい、ぐっすりお休みだったので、そのままお寝かせしておいた方がいいと思うて」

「ありがとう、寝るつもりはなかったんだけど」

昨日に比べると、格段に慣れていた。考えなくても自分がナキータのつもりで話していた。

「どうぞ」

お茶の準備が出来ていた。ここでは朝起きるとお茶を飲む習慣らしい。今井はテーブルに座った。

こんな事を聞くと不審に思われるとは思ったが、この世界のことがどうしても聞いてみたかった。

「あの、太陽も結界世界で作ったものなの？」

ミリーは不思議そうな顔をする。

「単に結界の外の世界が見えているだけです」

あつさり説明されてしまった。

洗面所で顔を洗って、鏡の前に座ってミリーに髪の手入れをしてもらった。

櫛がなかなか通らない。ミリーは丁寧に櫛で梳いてくれた。着物はミリーに選んでもらって、ミリーに着せてもらった。

「昨日ゾージャが言っていたんだけど、『法力使い』て何なの？」
着物を着せてもらいながら聞いてみた。

「人間の中に法力を使える人がいるんです。妖怪は彼らの法力にはかないません」

「それに私が捕まったの？」

「そうです。法力はくもの糸のように身体を締め上げてくるそうです」

きのうより着付けが大変だった、着付けが終わると鏡の前に行った。

鏡にはかわいいナキータが写っていた。綺麗なふわとした着物を着て嬉しそうにわらっている。鏡が大好きになってしまう。

「ミリーあなたのセンスはすばらしいわ、これ大好き」

演技ではなくて本気で言っていた。

「ありがとうございます」

ミリーはナキータの着物の後ろを直している。

「今日はお医者さまの所へいきますから、記憶が戻るかもしれないね」

なにげなくミリーが言った。

「いえ、ゾージャは行かないと言ってたわ」

今井は深く考えず答えた。

ミリーはビックリしている。

「そんな、お医者さまの所へ行くべきです」

「でも、ゾージャは記憶が戻らない方がいいそうよ」

ミリーは手を止めた。

「ゾージャ様がそんなことを・・・」

「どうしたの？」

ミリーが黙っているので今井は振り返った。

「ナキータ様、私がお医者様の所へお連れします」

ミリーは本気でナキータの事を心配してくれる。本来だったら医者に行くべきだろう。しかし、医者はずい、行くわけにはいいい。

「でも、ゾージャはこのままがいいって言っているし」

「ゾージャ様にはナキータ様の記憶がない方が都合がいいんです」

ミリーは奇妙な事を言い出した。

「どういうこと？」

しかし、ミリーは黙っている。

「記憶がない方がいいって、どう言うこと？」

「すみません、使用人のぶんざいで言いすぎました、お二人の事に口出しすべきではありませんでした。でも、記憶がない方がいいからってお医者様に連れて行かないのはあまりにひどすぎます。許せません、私がお医者様にお連れします」

ゾージャとナキータの間にはややこしい関係があるのかもしれない。しかし、問題は医者だ、医者には行かない事をミリーに納得させなければならぬ。

「私は何も分からないから、今はゾージャに頼るしかないの、だからゾージャの言う通りにするわ」

苦しい言い訳をした。

「ゾージャ様にだまって行きましょう、わかりやしません」

ミリーはナキータを必死で見つめている。絶対に連れて行くと決心しているようだ。

「ミリー、わたしはゾージャの妻よ、だから、ゾージャの言う通りにする」

今井も、妻たる者にとって当然の事だと言わんばかりに言った。

ミリーは困ったような顔をしていたがしぶしぶ引き下がった。

着替えが済んだら食堂に向かった。廊下を進むと扉がある、昨日の壁の途中にあった扉だ。

扉を開けた。ちよつとした張り出しがあるだけで下を見ると怖い。精神を集中して浮き上がり、そのまま宙に飛び出した。ここは上下に移動するための空間なのだ。この家にはこのような空間が何ヶ所かある、ちょうど上下方向の廊下みたいなものだ。今井はゆつくりと下へ降りた。

ゾージャはもう来ていた。

「おはようございます」

今井は昨日の席に座った。

「眠れた？」

ゾージャが聞く。

「ええ、ぐっすり」

「その着物がかわいいな」

ゾージャが言う。

彼に褒められるとなぜかうれしい。

今井は袖を動かしてゾージャに見せた。

「これ、ミリーが選んでくれたの」

今井はできるだけ愛想よく言った、ゾージャの機嫌を損ねたくない。

「それ、始めて見るな、そんなにかわいいの持っていたんだ」

「かわいいと思う？」

「おまえ、確かに変わったな、以前はケバケバしいのばかり着ていた」

「きのう着ていたようなの？」

きのう着ていた着物はどぎつい赤で今井もあまり好きじゃなかった。

「これからはゾージャが好きなのを着るね」

今井はかわいいナキータの演技を楽しめるようになってきた。

食事を始めた。簡単な料理だが今まで食べたことがないようなものばかりだ。着るものといい、食べ物といい妖怪独特の文化を作り上げている。

ゾージャは嬉しそうにナキータを見つめている。

「君は変わったなあ、まるで誰かが乗っ取っているみたいだ」
今井はぎくりとした、しかし、ここであせるとまずい。

「乗っ取るなんて、そんなことがあるの？」
平静を装って聞いた。

「他人の身体に自分の魂を送り込むんだ、相手が弱ければ乗っ取れる」

「相手はどうなるの？」

「死ぬさ、同時に二つの魂が一つの身体には存在できない」
思わぬ所から乗っ取りのことが分かってきた。もつと知りたい。

「元の自分はどうなるの？」

「眠ったようになる。ここが弱点なんだ。乗っ取っている間に自分の身体を殺されると、乗っ取り先の魂も死ぬ。だから自分の身体を結界に入れて絶対に安全にしてからでないと乗っ取れない」

そうなのか、じゃあ戻るにはどうするんだらう。

「乗っ取って、元の身体に戻るの？」

「もちろん、魂を自分の身体に戻せばいい」

なるほど、確かにそうだ、それが自分にできるのだろうか。かなり危険な質問だがどうしても聞いてみたい。

「わたし、魂を扱う妖力は持っているの？」

「妖怪世界で君の右に出る者はいないな、魂に関しては君はすごい妖力を持っている」

よかった、これで問題が解決だ。自分でナキータの中の魂を自分の身体に戻せばいい。

ゾージャはナキータをしげしげと見つめた。

「まあ、君が乗っ取られるようなへマをやるはずないな」

「あたりまえでしょ」

今井は勝ち誇ったように言った。元に戻る方法がわかった、それも誰の助けも借りなくて自分で出来そうなのだ。

こうやって妖怪の妻としての生活がはじまった。

数日が過ぎた。

ここの生活ににもずいぶん慣れてきた、ゾージャとも普通に話せるし、ナキータの演技も演技しなくてもできるようになってきた。妖怪の妻として一生を過ごしてもいいとさえ思うくらいになった。今井はほとんどの時間をゾージャと妖術の練習をして過ごしていた。たくさんの妖術が使えるようになった。

その一方で、この家の雑用が発生し始めていた。

「金はここに入っているから」

ゾージャが金庫みたいな箱を指差す。

いきなり、金の事を言われても意味がわからない。

「お金？」

「そろそろ出入りの業者の支払いの時期なんだ。俺がいない時は君が支払ってくれ」

なるほど、彼の妻なのだから、そういう仕事はやらなければならぬかもしれない。

「おまえ結界の妖術は使えたよな」

今井は結界の妖術は習っていた。ここでは鍵に相当するものが結界なのだ。家にも部屋にも結界で鍵を掛ける。そして結界は結界を張った妖怪でなくても呪文で開閉ができるようになっていた。妖力の弱い妖怪が掛けた結界は強い妖怪に破られてしまうので、強い妖怪が結界を掛けておき普通は呪文を使って開閉する。ゾージャは非常に強い妖力を持っていて、ナキータもそこその妖力を持っていた。これがミリーになるとかわいそうなくらい弱い妖力しか持っていない。

「まって、今思い出すから」

たくさんの妖術を習ったから、いきなり実地試験が始まると思い

出すのにちよつと時間がかかる。

今井は練習のときにしたような小さな結界を作ってみた。

「できた」

「よし、じゃあ、この金庫の結界の呪文はx x x x x x x xだ。解いてみる」

ちよつと緊張する。出来なかったらまたゾージャにバカにされる。やってみたが、金庫の結界はびくともしない。

「違うだろう」

ゾージャが頭を振る。出来ないゾージャはバカにするが、数日でこれだけの妖術を覚えたのだ。そっちを評価して欲しい。

「どうやるんだっけ？」

女はこういうときに得だ。出来なくても、むしろかわいく見える。「こつやるの」

ゾージャは教えてくれた。とりあえず金庫の結界は開けることができた。

ゾージャが中からお金を取り出した。紙幣だ。妖怪の世界も人間の世界とほとんど同じみたいだ。彼は紙幣の種類を説明してくれるので今井はそれをメモに書き留めた。もうメモにはびっしり書き込んである。彼らの言葉は日本語なので文字も日本の文字だ。

今日はゾージャは機嫌がいい。金庫の結界を掛けた所で、今井はもう一度魂を扱う妖術の話を持ち出してみた。今まで何度頼んでもゾージャは教えてくれないのだ。

「ゾージャ、お願い、魂を扱う妖術を教えてくれない？」

ゾージャは厳しい顔になった。

「その妖術は知らない方がいい」

困った、魂を扱う妖術が出来ないと元の身体に戻れない。

「お願い、教えて」

「魂を扱う妖術で何をするつもりだ」

「私の魂を扱う妖力は強力なんでしょ。それなのに扱えないのは納

得できなくて」

毎回違う口実を言っているのだが。

「あれは、人間の魂を食べる以外に使い道がない、知らなくていい」

「絶対に、人間の魂は食べないって約束する」

ゾージャは怖い顔でナキータを見た。

「だめだ」

「もし食べたら私を殺していい」

絶対の決意を言っただつたもりだったが。

「なに、アホなこと言ってる。俺がお前を殺せるはずないだろう」

困った、このぶんだと魂を扱う妖術は絶対に教えてくれそうにない。それが分からないと元の身体にもどれない。まだ当分ここになければならないのか。

5・浮気

ゾージャがいない時は、空を飛んで楽しんでいた。

ここへ来て一番よかったことは空が飛べることだ。青い空の中に飛び出して行く。高い所まで上がると遠くまで見える。山々が連なり、遠くの山は霞にかすむ。低く降り、険しい岩肌にそって飛ぶ。尾根を飛び越えると、眼前に雪山が広がる。冷たい風を切って飛ぶ。雲が山を越えていく、その雲の上を雲と一緒に飛ぶ。今井は楽しくて楽しくて仕方なかった。

飛び疲れると、岩場に降りて景色を楽しむ。岩の隙間に草が生えていて小さな花が咲いていた。

花を見ていると。

「ナキータ」

不意に男の声がした。

見ると、精悍な感じの男が立っている。ゾージャよりは痩せているが筋肉質の体はゾージャよりたくましい。

「いつ、出てきたんだ、知らなかった」

ナキータの知り合いらしい。ここでは、どうしてもこの問題が起きる。知っているはずの人に会った時困る。

男は近づいてくる。なんか、ヤバい感じた。

彼はナキータの体に手を回そうとする。今井はその手を振り払った。

「どうしたんだ。ナキータ、いやなのか」

今井はうなづいた。

「なぜ、3年ぶりだぜ。やっと出られたんだろっ」

彼は親しそうに話す。

「ナキータ」

またすり寄ってきた。腰に手を回そうとする。今井はその手を押し戻した。

「なぜだ。いつも、お前のほうから来てたじゃないか」

ナキータは浮気していたのか。

男はどんどん近づいてくる。後ろに逃げ場がなくなった。

「ナキータ。お前が好きなんだ。なあ、じらすなよ」

この男は、あまり感じがよくない。確かに、ゾージャの方が誠意が感じられる。

「ゾージャがいます」

今井はやつと言った。

男は笑った。

「ゾージャ、あいつがなんだってんだよ、あいつに義理立てするお前でもないだろう」

男はナキーの腰に手を回した

「ゾージャがいます。いやです」

「ゾージャはきらいだって、言っただけじゃないか。ゾージャとはわかるって」

男は力ずくでナキータを抱きしめる。

今井は、どこかで、この体をゾージャのために守らなきゃという気になっていた。しかし、力ではとてもかなわない。組み伏せられ地面に横になる。

飛ぼう、今井は妖力をつかって飛び出した。

男の手を逃れ、上に向かって飛んだ。後ろを見ると、男が追ってくる。ぐんぐん追いつかれる。今井は必死になって全力で飛ぶ。後ろを見ると少しづつ男を引き離している。そのまま頑張つて飛んだ。追いつけないとわかったのか男は諦めて、引き返していった。

今井は自分の部屋に戻ってきた。息が荒くなっていた。こわかった。

窓をぴしゃと締め、椅子に座った。

納戸からミリーが出てきた。ミリーは納戸の片付けをしていたのだ。

「どうされたんです？」

「へんな男に襲われて、怖かった」

「大丈夫でしたか、お怪我はありませんか？」

「大丈夫、怪我はないわ」

人間の世界もそうかもしれないが、女が一人でひとけのない所へ行くのは危険なのだ。男の時は考えもなかったことだ。

「どんなやつでした、訴える方法もありますよ」

「それが、少し変なの、私と付き合っているような事を言うの」

ミリーの表情が変わった。

「もしや、マドラーさんではないですか？」

「マドラード？」

「ナキータ様の浮気のお相手です」

ミリーはちよつと言いにくそうに小さな声で言った。

今井は驚いた。

「わたしの浮気をあなたが知っているの？」

ミリーはうなづいた。

「ゾージャ様もご存知です」

今井はあきれてしまった。この浮気はとんでもない事態になっているのかもしれない。

「じゃあ、ゾージャはなんと言っているの」

「お二人は喧嘩が耐えませんでした」

そうだろうな。浮気が見つかったら大事だ。

「最近では、ゾージャ様に浮気を隠さなくなってきた、ゾージャ様との関係は最悪です。ナキータ様はもうゾージャ様と分かれたがっているのですが、ゾージャ様はなんとか元に戻したいとお考えです。ゾージャ様がナキータ様の記憶がない方がいいと言ったのは、この事です」

それでゾージャは性格の変わったナキータをあんなに喜んでいたのか。ナキータが封印される直前は喧嘩別れ寸前だったに違いない。それが、こんなにゾージャを慕うようになったのだから彼にとって

願ってもないことだったのだろう。しかし、どうしたらいいだろう。まさか、ナキータのややこしい愛憎関係を引き継ぐ訳にはいかない。

「ミリー、私はこの事は知らない事にするわ」

「マドリードさんはどうされるんです」

「断るわ」

「私もそれがいいと思います。ただ、断り方には注意して下さい。一時、決闘になりかかったんです」

「決闘！」

「幸いなことに肝心のナキータ様が封印されてしまったので、この決闘はお流れになりました」

これだけかわいいと男が私を取り合って決闘までするのか。

「わかった、注意して話すわ」

そう言ったものの、決闘を防ぐよううまい話し方などできる自信などない。ナキータが残したとんでもない愛憎関係を引き継がざるを得ないのかもしれない。

「お酒でもお持ちします」

ミリーはお酒の準備を始めた。男に襲われて興奮しているのでお酒がいいと思ったのだろう。

今井はふと魂を扱う妖術の事を思い出した。ひょっとしたらミリーは知らないだろうか。

「ミリー、あなた魂を扱うことできるの？」

「その妖術は知らない方がいいと思います」

ゾージャと同じ事を言う。まだ、教えるとも何とも言っていないのに。

「食べないわよ」

ちよつとムカツとする。

「で、知っているの？」

「幸いなことに知りません。私のような弱い妖怪には魂は扱えません」

ミリーはお酒を持ってきた。

ちよつと口をつけてみた。強いお酒だ。

「ナキータ様のはご病気です、ご自分ではどうにもならないんです。だからその妖術はできない方がいいんです」

ミリーの目は真剣だ。たぶんミリーの方がゾージャよりも難攻不落だろう。ミリーに頼むのは無理だ。それに本当に知らないのかもしれない。

今井はもう一つ知りいことがあった。人間界に行く方法だ。ここに来るときに通った所が妖怪世界と人間界の入り口になっていることは間違いない。場所を覚えているから行く事もできる。しかし、入り口には必ず結界が張つてあるはずなので結界を開く呪文がいる。「ミリー、あなた人間界に行ったことある」

「はい」

よかつた、行ったことがあるなら呪文を知っているはずだ。

「出入り口の結界の呪文はなんというの？」

できるだけ、何食わぬ顔で聞く。

「人間界には行かれない方がいいと思います。法力使いが・・・」

ミリーはナキータの事を思つて言っているのだろうが、これではどっちが主人かわからない。

「ミリー」

今井はいらいらしてきてミリーの言葉を遮つた。

「あなたの言いたいことは分かつたから、呪文を教えて」

ここに来たときにびくびくしていたのが嘘のようだ。腹がたつてきつい口調で言つた。

「人間界に行かれるんですか？」

「私はみんなが知っている事を知っておきたいだけ」

ミリーはちよつともじもじしていたが。

「わかりました。呪文は××××××××です」

ミリーはナキータの機嫌が悪いので、緊張している。

「ありがと、封印された穴に忘れ物をしたから取りにいくだけよ」

「お氣をつけて下さい」

ミリーはナキータの横にじっと立っている。なにか言わないと氣まずい雰囲気だ。今井はお酒をぐいっと飲みほした。

「もういっぱいちょうだい」

「はい、ただいま」

今井は自分の身体がどうなったか心配だった。ゾー ज्याの説明では、乗っ取りをするときは自分の身体は結界に隠しておくと言う、自分の身体が一番の弱点なのだ。その身体の安全をどうしても確認したかった。次の日、様子を見に行くことにした。

ここの着物では人間世界では目立ちすぎる、納戸にはナキータの人間の服が何着かあったのでそれを着ることにした。ナキータの服はものすごいミニスカートだ。女装のような感じで、どきどきしながらミニスカートをはいた。ブラウスもキチキチで胸が目立つ。ここの着物も女性用を着ているのだが元々女性の着物との意識がないから女装の感覚はない。

テラスへ出ると青空に向かって飛び出した。ここへ来た時にゾー ज्याが飛んだコースを逆向きに地形を思い出しながら飛んだ。途中何度か迷ったが、ついにここだと思える場所に着いた。ここに人間界への入り口があるのだ。直径が数メートル程度の結界があった。妖術を習ったから結界が分かるようになったがここへ来るときはぜんぜん氣がつかなかった。呪文で結界を開いて通りに抜けると景色が変わった。そこは平地で川が流れていて橋があった。人間界だ。

今井は携帯電話を取り出して救急隊に電話し、自分が入院した病院を教えてもらった。

そこは総合病院だった。町の中の病院で10階建てくらいの建物が2棟建っている。まず、人目に着かない場所に降りて歩いて病院に向かった。綺麗な病院だ。中に入ると広い待合室があって大勢の

人がいる。受付で今井の名前を言うとすぐに入院している病室を教
えてくれた。病室は4階だった。

病室に入ると、そこは二人部屋で窓側のベットにいた。

鼻にチューブを通して眠っている。とりあえず大丈夫そうだ。

今井は椅子を持ってきて自分の横に座った。こうして自分を見つ
めるのは不思議なものだ。

そつと布団をかけてあげる。

「あんた、その人の彼女？」

隣のベットの人が聞く。

「いえ、ただの友達です」

「長い付き合い？」

「まあ、そんなもんです」

軽く受け流す。

彼はちよつと咳払いをすると。

「その人なあ、わしは妖怪に魂を吸われたんだと思うんだが」

今井はびっくりして振り返った。

隣のベットには老人が座っていた、白髪を短く切った痩せた小柄
な人だ。

「驚くのも無理はないが、妖怪は本当におるんじゃ」

この人妖怪の事を知っているのか。

「ナキータという妖怪がおつてな、人の魂を食べよる。そのナキ
タがな、数日前に封印を破って逃げ出したんじゃ、しかもその場所
でその人が倒れていた。まず、ナキータにやられたんだと思う」

今井はまじまじと老人をみた。

「あの、どなたなんですか？」

「ん、わしは法力使いじゃ、法力で妖怪から人間を守っておる」

「法力って？」

「妖怪をやつつける力じゃ、人間には1万人に一人くらい法力を持
ったものがある、それらが集まって妖怪と戦っておつてな、わしも
その一人じゃ」

ゾージャ言っていた話だ、ナキータを封印したのもこの人達だ。

「じゃあ、彼を助けることも出来るんですか？」

今井はベットの自分を見た。

老人は首をふった。

「無理じゃ、その男を助けたかったらナキータに頼むしかない」

ナキータは自分なんだが。

「もう一度ナキータを封印する。今度は逃さん」

老人は気になることを言う。

「どうやって封印するんですか？」

「なに、今大勢の法力使いが集まっておる。法力を集めてナキータを引きずりだし元の穴に封印する」

恐ろしい話だ。これが本当なら自分は封印されてしまう。

「ナキータがもう人間を襲わなくなっても封印するんですか？」

思わず不自然な質問をした。返事しいでは、本当の事を説明して封印をやめてもらわなければならない。

「ばかな、ナキータじゃぞ。何人殺したと思っている。改心してももう遅い」

ナキータは人間にものすごく恨まれているらしい。このぶんだとナキータの中身は人間だと言っても言い逃れと思われるだけかもしれない。

「いつ、封印するんですか？」

「居所がわからんぞ。まあ、そのうちに探し出す」

よかった。まあ、今、目の前にいるのにわからないくらいなら見つかることもないだろう。

今井は老人のベットを見た、本がたくさん置いてあってとても病人には見えない。

「どこがお悪いんですか？」

「血圧が高くてな。いや、その人の話を聞いたんで、ナキータがここに来そうな予感がして。無理いって同じ病室にしてもらったんじゃない」

「ナキータがここにですか？」

今、来てますよと言いたかったが、それはこらえた。

「ああ、わしはナキータとは親しいんじゃない、ナキータが来たらその人を元に戻すように頼んであげるよ」

うそをつくな、親しいんなら今ナキータが目の前にいるのがわかるはずだろう。

「お願いします」

話を合わせておいた。

「あんたの彼は、検査ではどこも異常は見つからないそうだ。魂を吸うわれたんじゃないからな、そうだと思う」

「そうなんですか」

健康は問題ないらしい少し安心した。後は魂を扱う妖術をどこかで教えてもらうだけだ。

「そうだ、あんたの彼な、その人も法力を持っている」

「えっ、俺・・・彼が法力を？」

「そうだ、それもあり強いやつをな」

俺が法力を持っているなんて驚きだ。

「その人、元気になったら、私たちの仲間になるといい」

「あの、法力があると何ができるんですか？」

「何もできん。ただ妖怪と戦えるだけじゃ」

看護婦さんが入ってきた。今井は立ち上がってお礼を言った。

「あんたの彼の身体を拭くんじゃ、外に出ていた方がいい」

老人が説明してくれた。看護婦さんが拭くのはちよっと恥ずかしい。

「それじゃ、私はこれで」

今井は頭を下げて病室から出た。部屋の入り口で名前を確認した。老人の名前は『沖田』だった。

6・法力使い

ゾージャは夕食後は本を読むのが日課だった。特に用がないときは自分の部屋で本を読んで過ごしていた。そして今井もゾージャと一緒にいた。本心は1人で自分の部屋にいたかったが、一緒にいた方がゾージャが喜ぶと思ってゾージャの部屋で一緒に本を読んでいた。

しかし、今日は、昼間の沖田さんの話が気になっていた。

「ゾージャ、私がここにしても法力使いは危険なの？」

ゾージャは顔を上げた。

「何を心配してるんだ？」

「あたし封印を破って逃げ出したでしょう。法力使いは私を追いかけていないのかと思って」

ゾージャの顔が急に険しくなった。

「確かに、そうだ」

「ここにいれば大丈夫よね」

ゾージャは深刻な顔して考えている。

「もし、やつらがもう一度封印するつもりなら・・・」

ゾージャはその考えを振り払うように頭を振った。

「大丈夫だ、そこまでしつこくないよ。逃げた事にも気がついていない」

「逃げたことに気がついてるよ」

気がついていないことは間違いない。

「大丈夫だ、気にするな」

そう言われると逆に気になってきた。

「ここにいても、安全じゃないの？」

「ああ、やつらが法力で襲ってきたら、向こうの世界に引きずり出されて封印されてしまう」

そうなのか、今井はだんだん怖くなってきた。

「でも、居場所が見つからないと大丈夫なんでしょう?」

ゾージャは心配そうな顔をしている。

「やつらが、本気で探せばそのうち見つかる」

「見つかったら、どうなるの?」

「探していないよ、心配するな」

探しているのは間違いないのだ。では封印されてしまう。

「封印されたら、どうなるの?」

ゾージャは辛そうな顔をしている。

「その話はやめよう」

「教えて、どうなるの?」

「この前のは偶然で、普通は死ぬまで封印される」

「いやよ、ぜつたい、いや」

あんな狭い穴の中に死ぬまでいるなんて。考えるだけでも恐ろしい。

「ゾージャ、どうすればいいの?」

「だから、探していないって」

「探してるわよ。法力と戦うにはどうすればいいか教えて」

「探していないって」

ゾージャは頑なに首を振る。

「ゾージャ、お願い、法力との戦い方を教えて」

「法力に抵抗する方法はないんだ」

そんなバカな、封印されてしまう。

「でも、今までは、大丈夫だったんでしょ」

「それは、人間を襲っているのが君だと人間に分からなかったからなんだ」

そうなのか、ナキータだと分かっている今、ナキータの逃げ道はないのだ。

「ゾージャ、助けて、封印されるの絶対にいや」

今井は本気でゾージャに抱きついた。

ゾージャはナキータをやさしく抱きしめてくれる。

「心配ないって、探していないよ」

このままでは封印されてしまう。法力でなんとかする以外にない。最初からあきらめるなんてできない、絶対に戦ってみせる、俺には法力がある、法力で戦おう。

今井は今日から法力の練習をするつもりだった、しかし、どうやって法力の使い方を会得するかまったく当てがなかった。

7・魂の妖術

次に日、今井は自分の部屋でのんびりしていた。すると、窓からコツコツと音がする。窓に行ってみると、この前、ナキータを襲ってきた男が宙に浮いてこつちを見ていた。ミリーの話ではマドラードとか言う名前でナキータの公然の浮気の相手らしい。

ナキータの恋人ならナキータの気持ちを無視して今井が勝手に冷たくするのもどうかと思えた。それにうまく対応しないと決闘騒ぎになっても困る。

今井は扉を開けてテラスに出た、マドラードはテラスに降りてきた。

「ナキータ、記憶がないんだって」

今井はうなずいた。

「それで、この前は俺を怖がって逃げたんだ、理由がわかってよかったよ」

「マドラード、わたし、何も覚えていないの。だから、あなたは、まるで始めて会う人と同じなの」

できるだけ傷つけずに断らなければならない。

「あなたとどんな話をしたのか、あなたとどこへいったのか、まったく何も覚えていない、だから今までのようにはいかないの」

マドラードの目を見つめた。彼は、ナキータの目を避けて下を向いた。

「君の気持ちはわかるよ。封印されたのも大変だったし、記憶がないんじゃない不安だよな」

「ごめんなさい」

低姿勢でもかく断り通すしかない。

「このまま、ゾージャと所にいるつもりか？」

今井はうなずいた。

「ゾージャのやつ、とんでもない奴だな。君の記憶がない事をいい

ことに。君を自分のものにして……。君はもうゾージャとは分かれるところだったんだ」

そうなのかもしれないが、もうしかたがないのだ。

「私、記憶がないから、誰かに頼らざるを得ないの。わかって」

「ゾージャより俺の方がましだと思うがな」

「今、ゾージャの所にいるから、そのままの方がいい」

これが、最初にマドラードに見つかっていればマドラードの所に住むことになっただろう。

彼は残念そうだ。

「私たち、これで終わりにしましょう」

彼の顔を見て、できるだけやさしく言う。

「わかった、身を引くよ。ただ、君はかならずゾージャが嫌いになる、ゾージャの本性がわかったら喧嘩が始まると思うよ。記憶をなくす前の君がしたことと同じ事を君はもう一回する」

彼はナキータの両肩を持った。

「その時は俺がいることを覚えていてくれ、俺は君のために命をかける」

ナキータはもう死んでいないのだ、彼がナキータを引きずったら気の毒だ。

「私のことは忘れて」

「忘れられるわけないだろう」

「私はいなくなっただと思って、封印されて死んだだって」

「ここにいないじゃないか」

「ここにいないのは偽者なんだ。」

「もう二度とあなたを好きになることはありえないの、ナキータはいないんだから」

彼は不思議そうにナキータを見つめる。

ナキータは彼の手をそっとさわった。

「さようなら」

彼はナキータをしばらく見ていた。そして決心したのかテラスの

端へ歩いていく。

「魂を食べるのはやめろよ」

「わかった、もう食べない」

「君の妖力は他の事に使うんだ」

「他のこと？」

彼は今にも飛びたちそうだった。

「他のことって、なに？」

彼はテラスの端に立ったまま振り向いた。

「君の魂の妖力は強力だから武器になる。うまく使えば男と勝負して勝てると思うよ」

「男に勝てる？」

「いつも言ってたじゃないか、女は損だって。でも君は男と同じことができるかもしれない」

なんの話しかわからないが、でも、ひよとして彼に頼めば魂を扱う妖術を教えてくれるかもしれない。

「ゾージャは魂を扱う妖術を教えてくれないの。教えてくれる？」

「妖術が使えないのか？」

「妖術の使いかたも忘れているの、だから今練習中」

「で、魂を扱う妖術を習いたいのか？」

「もちろん魂を食べるためじゃない。一番得意な妖術なのに使えないのは悔しくて」

彼は戻ってきた。

「かまわないけど」

ナキータの部屋で妖術の練習をした。

マドラーは丁寧に教えてくれた。彼を練習台にして魂を少し吸い出すこともやってみた。吸い出すだけで口の中にはいれない。魂の扱い方が分かってきた。

「君の魂の妖術は桁外れに強力だから武器になる、ヤバい時はこれを使うといい、君のこの妖術を防げる奴はまずいない」

彼は重要な事を教えてくれた。これを知っていたおかげで今後助かることになった。

「次は、魂を体から体に移す妖術を教えてくれる？」

いよいよ肝心の妖術を教えてもらえる。

しかし、マドラードは考えている。

「それは、かなり難しい。十分に魂が扱えるようになってからがいい」

「大丈夫よ」

「危険なんだ、自分の体から魂を出して、うまく相手に入らなかったら、死んでしまう」

危険なのはわかる。しかし、なんとか教えてもらわなければならぬ。

「やり方だけでも、教えて」

「それは、今度にしよう」

彼は教えてくれそうにない、あとちょっとなのに。

「お願い」

今井は必死にマドラードの目を見つめた。

「魂を扱う練習をする方が先だ」

絶対に教えてもらわなければならぬ。こうなったら、どんな犠牲を払ってもいい。

「もし、教えてくれたら・・・」

今井はちらつとベツトを見た。

ナキータの言った意味が通じなかったのか、マドラードはけげんな顔をしている。

「誰か、体に乗っ取りたい人がいるの？」

彼の表情は急に冷たくなってきた。ナキータが何を考えているか探っている。

やりすぎると、今井のことがバレるとまずい。

「わかったわ。じゃあ、今度教えて」

確かにそうかもしれない。彼が危険と言うなら危険なのだろう。

まず魂を扱う妖術の練習が先だ。

「今度、ねずみを持ってきてあげよう。ねずみで練習するといい」
彼はテラスへ出た。

「今度は俺のうちへ来いよ。そこで練習しよう」

マドリードを断るつもりが、とんでもないことになってしまった。これでは浮気の続きが始まってしまふ。こんなことをするんじゃない。後悔してももう遅かった。まあいい、なんとかなるだろう。今井は持ち前の図太さであまり気にしないことにした。

8・封印

それから数日が過ぎた。

今井は毎日新しい着物を着ていた、ナキータが持っている着物はものすごい量あるから、毎日新しいものを着ても全部着るのは1年はかかりそうだった。ゾージャはものすごい金持ちなのだ。そしてナキータはそれをいいことに贅沢三昧をしていたみたいだ。こんなに着物を買っなんてゾージャの家計にどの程度の負担になっているのだろう。今井の育った家庭は裕福ではなかった。欲しいものがあるっても我慢するのが当然だった。

ところが、その日は、ゾージャが馴染みの呉服屋を連れてきた。

「ナキータ。君がいつも着物を買っているノリタさんだ」

ノリタさんはナキータの部屋に入ると丁寧に頭を下げた。

「ご無沙汰しております。封印された時は心配しておりました」

彼は持つてきた大きな箱を床に下ろした。

「記憶をなくされたとか、さぞや大変かと存じます。でもお元気そうで安心しました」

今井はなんと対応したらいいかわからない、かすかに会釈した。

「さて、今日は新しい着物をお持ちしました」

彼は箱から着物を取り出して、それをベツトに広げた。確かに綺麗だ。裾が大きく広がった華やかなデザインでこれを着たらナキータはすごいぶんとかわいくなるだろう。

「いかがですか、綺麗でしょう。ナキータ様がお召しになれば、さぞやお美しいと存じます」

確かに綺麗だが、ずいぶんと高いんじゃないだろうか。

今井が黙っていると。彼はにこやかに笑いながら、もう一着広げた。これも綺麗だ。柄がいい。

「これなどはいかがでしょうか、すばらしい一品だと存じますが」「どう、これなんか？」

ゾージャが嬉しそうに聞く。

「これ高いんでしょ？」

「気にするな。二着買ってもいいぞ」

ナキータがたくさん着物を持っているのは、ナキータだけが悪い訳でもなさそう。ゾージャはナキータの気を引きたくて彼女の大好きな着物を買ってやっていたのだろう。特に浮気騒動があるから今はナキータの機嫌を取っておきたいのだ。

「高そうだから、ちよつと・・・」

今井はミリーを見た。彼女は無表情で少し離れて立っている。彼女はこんな着物を一着でも持っているんだろうか。

「遠慮するなよ」

ゾージャは嬉しそうに勧める。

「ゾージャ、納戸の中見たことある。着物がもう置くところがないくらいあるのよ」

「そりやいかな。半分捨てたらどうだ」

ゾージャはかなり感覚が違う。

ナキータがもじもじしていると、ノリタさんはもう一着広げた。

これは綺麗だ。華麗でふわつとしていて実にいい。こんなのを着たらどんなに楽しいだろう。かわいいナキータがもつとかわいくなる。これは欲しい。

ナキータの顔に出た表情をゾージャは見逃さなかった。

「これをもらおう」

ゾージャはノリタさんに注文する。

今井は迷った。確かにこれは欲しい。しかし俺は男なのになぜこんなものが欲しいんだろう。それに買うべきじゃない。あんなに着物があるのに。

「ゾージャ、いいわ、いらない」

ゾージャは戸惑っている。

「遠慮するなよ、欲しいんだろう」

今井は欲しい気持ちもあった、迷っていると。

「3着全部もらおう」

ゾージャは3着とも買ってしまった。

ノリタさんは丁寧に頭を下げている。こんな高い着物をゾージャに買わせるなんて、俺は悪妻かもしれない。

今井はノリタさんが何か書類を書いているのを待っていたが、さつきから指の先がピリピリしていた。

なんだろうと思っていたが、だんだんひどくなる。手足が動かしにくい。

ねばねばした糸が体中に巻きつく感じだ。手足が思うように動かない。

「ゾージャ。私、なにか変。病気みたい」

「どうしたの？」

「なにか。こう糸が絡まってくるみたいなの」

「糸？」

ゾージャはげんな顔をしている。

今井は頑張ってみるが、どんどん手足が動かしにくくなる。

「絶対、なにか変」

ゾージャはだんだん深刻な顔になってきた。

「法力かもしれない」

「法力ならどうしたらいいの？」

「がんばるんだ」

法力使いがナキータの居場所を見つけ封印を始めたのだ。

「がんばるって、どうがんばるの？」

ゾージャは動揺している。あせっているのがわかるが、何もできないのだ。

「ナキータ」

彼はナキータを抱きしめた。

「ごめん。ナキータ」

「封印されるのは、いや、助けて」

ゾージャはナキータを強く抱きしめた。しかし、糸はぐんぐん締まってくる。

まったく身動きできなくなってきた。息をするのもきつい。

「ごめん。ナキータ。ごめん」

ゾージャは涙声だ。これがゾージャとの別れになるのだろうか。あの狭い穴が脳裏に浮かんで恐怖が身体を走った。あそこに死ぬまで封印される。自分は人間だと言っても信じてくれないだろう。今井は歯をくいしばった。負けてたまるか。ナキータに襲われた時のことを思い出した。あの時みたいに戦えばいい。

突然、あの時ナキータが法力と言ったのを思い出した。あの時法力を使ったのだ。あのやり方でやればいい。目をつぶり精神を集中して襲ってくる力に対抗した。攻撃している相手の感触があった。そこへ向けて精神を集中する。相手の心の揺れが伝わってくる。マドリードに習った通りに魂を探りにかかった。相手の魂に触れた。ナキータの中で何かが動いた。魂に反応してナキータのもっとも得意とする妖術が動きだした。相手の魂を吸い出す。魂はどんどん吸い出され口の中に入ってきた。えもいわれぬおいしさだ。恍惚感のなか、魂が胃の中に入っていく。

ハッ和我に帰った。人の魂を食べている。あわてて吐き出した。食べてしまった魂はそのまま口の中に残った。魂の味にしばらく動けなかった。

手を動かしてみた。普通に動く。糸はもうなくなっていた。相手の法力使いは魂を吸い出されて倒れたのだ。

「勝ったみたい」

「えっ」

ゾージャはナキータを抱きしめる手を緩めた。

「勝ったよ」

ゾージャは呆然としている。

「ゾージャもう大丈夫よ、法力使いはやつつけた」

「君が法力に勝ったの？」

ナキータはにっこり笑った。

「そうよ」

ゾージャは大喜びだ。がばっとナキータを抱きしめた。

「よかった。よかった。もうだめかと思った。君すごいよ」

ゾージャに抱かれながら、今井は舌を動かしていた。口の中に魂のおいしい味が残っている。気味が悪い。自分がどんどんナキータになってしまう。

今井は一人で自分の部屋にいた。疲れたと言って一人にしてもらった。

この戦いは今井にとってはかなりの衝撃だった。

人を殺したかもしれない。相手の法力使いはどうなっただろう。

どのくらい魂を食べたら人間は死ぬのだろうか。

それに、魂のおいしさもショックだった。あれなら我慢できないのも分かる。

どんどん自分がナキータ化している。ひょっとしたら自分も我慢できなくなるかもしれない。

戦いの興奮がまだ納まっていなかった。顔がほってていて目が痛む。

今井は頭を冷やすためにテラスの椅子にすわって、冷たい風にあたって心を落ち着けた。

ミリーがテラスにやってきた。

「お飲み物をお持ちしました。お酒でも飲まれると落ち着くと思います」

ミリーは本当に気が利く。

今井はグラスを取って少し飲んでみた。かなり強いお酒で口の中の魂の味を消してくれる。

「私がお邪魔でしたら、すぐ下がります」

「いえ、ここにいて」

ミリーがいた方が落ち着く。ミリーはなぜか心の支えになるのだ。

「ミリー、魂を食べたことある？」

いきなりとんでもないことを聞いてみた。

「いえ、ありませんけど」

「すごく、おいしかった。信じられないくらい」

ミリーはじつと聞いている。

「私が、なぜ魂を食べるのをやめられなかったのかが分かった」

「気になさらなくて結構だと思います。今のナキータ様は以前とぜんぜん違います」

ミリーは慰めてくれる。

「妖怪とはもともとそうしたものです。妖怪は人間の邪念が具象化したものと言われています。妖怪はこの世の苦悩や悔恨を背負って生きていく運命なのです。悩む必要はありません。強く生きてください」

今井はミリーを見上げた。その目はやさしく気高い。ふつと勇気を吹き込んでくれるような目だ。

なぜか、ミリーのそばにいると落ち着く。

ミリーはナキータが落ち着くと部屋を出ていった。

ナキータが法力使いに勝ったという話はたちまち広がっていった。

次に日、今井が部屋のいると窓からこんこんと音がする。マドリードだ。窓を見ると彼が宙に浮いてこちらをみている。今日はこそははつきりと断らなければならぬ。ゾージャが見たら浮気と思うだろうから見つかったら大変なことになる。

今井はテラスに出た。マドリードは彼女の前に降りてきた。手に籠をもっている。

「ほら、ねずみだ」

彼は籠を差し出した。しかし、今井は手を出さなかった。

「マドリード。わざわざありがとう。でも、私たちの関係は終わりにしましょう。私、ゾージャを裏切るわけにいかないの。今の私に

は、安定して生活が絶対に必要なの。だから、ゾー ज्याを頼るしかない。わかって」

マドラー ドは籠を差し出したまま、にこやかな顔をしている。

「私、記憶をなくした時はどうしたらいいかまったく分からなかったの、もしそんな時に、あなたに先に会っていたら、今頃あなたの家にいるかもしれない。でも、ゾー ज्याが来てくれたの。だから・・」

マドラー ドはナキータの言葉を遮った。

「魂を移動させる妖術が知りたいんだろ。ほら、ねずみは2匹いる。教えてやるよ」

籠を見ると、中にはねずみが二匹いる。思わず興味を引かれたが、思いとどまった。ゾー ज्याに頼めばいい。魂を吸い出す妖術ですでに知っている事をゾー ज्याに説明すれば、移動の妖術はゾー ज्याが教えてくれるかもしれない。だから、マドラー ドに聞く必要はないのだ。

「マドラー ド、私、真剣なの。もうこんな関係を続けたくない」

「ゾー ज्याを、当てにしているのなら、無駄だと思うよ。彼は教えてくれない、現に教えてくくれなかったんだろ」

彼はナキータの両肩を持った。

「誰の体に乗っ取りたいのか知らないが、それは君にとって絶対に必要なことなんだろう。死ぬ危険があつても構わないくらい。だったら俺が教えてやるよ。俺は理由なんかきかない。君が必要としているなら、俺が力になる」

理由も聞かず教えてくれる。これは魅力だった、ゾー ज्याなら絶対に何に必要なのか聞かれるだろう。

マドラー ドはナキータの手をつかんだ。

「こいよ、教えてやる」

彼は、扉を開けるとナキータを引っ張って部屋の中に入った。

「マドラー ド、困るわ」

彼は籠をテーブルの上に置いた。

「こいつで、魂の移動をやって見よう」

マドラードは説明を始めた。今井はやはり知りたかった。いつしかマドラードの手ほどきを受けていた。

「じゃあ、やってみて」

ねじみの魂をもう一匹に移す練習をやってみる。

一匹にねずみから魂を吸い出す。ねずみの口から細い糸のような魂が出てきた。それをもう一匹のねずみの口へ入れる。糸のような魂は宙をふわふわして思うようにいかない。

「早く入れて」

マドラードが言う。

あせるがうまく入らない。そのうち魂は湯気のように立ち昇り始め、そして陽炎のように消えてしまった。ねずみは死んでいた。

今井は頭を抱えてしまった。

「あせるな、これは難しいんだ。またねずみを持ってきてやるよ」
不意に、マドラードがナキータを抱きしめた。あまりに急で避けることができなかった。

「君が好きなんだ。愛している」

今井は彼から離れようと彼の体を押すが押し戻せない。

彼はキスをした。濃厚なキスでうつとりするような快感が押し寄せてきた。ゾージャの時は気持ち悪かったただけなのに。必死で彼の体を押すが手に力が入らない。

彼に抱き上げられ、ベットに倒された。彼が上にのしかかってくる。まずい、逃げようとものがくが彼はナキータを離さない。彼はナキータの体をさわりはじめた。

今井はマドラードが言った言葉を思い出した『ヤバい時は魂の妖術を使うといい』。そうだ、俺にはこれがある。今井はマドラードの魂を吸い始めた。

「なに」

彼は一瞬声を出したが、すぐに気を失ってナキータの上に崩れ落ちてきた。

今井は、すぐに魂を戻すと、彼をどかして立ち上がった。

マドリードもすぐに意識を取り戻した。

「マドリード、なにをするの、やめてよ」

動揺していてどんな口調でいったらいいか分からなかった。

「出て行つて」

マドリードはベットの上で体を起こした。

「わるかった。しかし、君はこの前、教えてくれたら・・・、と言っていただろう」

そうか、確かにこの前はそんな事を口走ってしまった。しかし、今はすこし事情が違う。今井は黙って立っていた。

マドリードはじっとナキータを見ていたが「わかった」と言っ
て立ち上がるとテラスへ出た。

「また、ねずみを持ってきてあげるよ」

彼はどこか楽しそうに言う。

「だめ、もう会うべきじゃない。これで終わりにして」

もう、これ以上彼を引きずるべきじゃない、きっぱり終わりにし
なければならぬ。

「さつきは悪かった。君を見ていたらむらむらつとして」

彼は微笑んだ。綺麗な目をしている。

「俺は見返りを期待して君に妖術を教えているんじゃない。君が必
要としているから教えているんだ。見返りなんか必要ない。君が俺
を必要としている限り、俺は何でもするよ」

彼は数歩離れた。

「また、ねずみを持ってくる」

そう言うのと飛び上がった。いった。

9・ゴルガ

ここにはゴルガという領主がいて、このあたり一帯を支配していた。ゴルガは大変な権力を持っていて、彼に逆らうものはいなかった。ゾージャはゴルガの家臣で、ゾージャがこのようないい暮らしができるのもゴルガの家臣だったからだ。

ナキータが法力使いに勝ったという話はゴルガの所に伝わった。

そのゴルガの所からゾージャの所へ使者がやってきた。ゴルガ様が呼んでいるからすぐに行くようにとのことだった。

すぐに出かけなければならぬ、家の中はちょっとした騒ぎになった。

「すぐ、正装をお持ちします」

ミリーが素早く部屋を出ていった。彼女は気が利く。

ゴルガに会うためには正装が必要らしい、今井には何が何やらさっぱり分らない、

「ゴルガって、だれ？」

ゾージャに聞いてみた。

「ゴルガさまはこのあたりの領主。俺たちの主になる。偉い妖怪だ」
ミリーがすぐに正装の着物を持ってきてゾージャに渡した。

ゾージャはミリーがいるのに着替えを始めた。しかも、ミリーがゾージャの横について着替えを手伝う。確かに正装は一人で着るのは大変みたいだ。

今井は何をどうしていいか分からないから横に立って着替えを見ている。

ミリーが着替えをかいがいしく手伝う。ゾージャは着替えながらミリーを見つめていた。

今井はどうしようもない無力感に襲われた。自分には何もできない。だからミリーが手伝うしかないのだ、分かっているても落ち着かない。

「はい」

ミリーが最後に飾りの短刀を渡す。ゾージャは笑顔でそれを受け取ると腰に差した。

着替えが終わった。なるほど正装は立派に見える。ゾージャじゃないみたいだ。

「いつてくる」

玄関でゾージャは二人に向かってそう言ったが、なぜかミリーに言っているように感じた。

ナキータとミリーはゾージャの帰りを待っていた。

この家には使用人が3人いる。一人は料理人で料理専門、もう一人はゾージャの近侍でコドニラ、そしてナキータの侍女のミリーだ。コドニラは中年の男性で背が高い。ゾージャの着替えはコドニラの仕事になる。しかし、ミリーは賢くて気がきく。使用人に上下は無いのだが実質ミリーが取り仕切っていた。

今井はさっきのことが気になってしかたがなかった。なぜかミリーに嫉妬を感じる。ミリーはナキータがいない3年間ゾージャのそばにいたのだ。何があったかわかりやしない。そう思うといらいらしてくる。

今井はミリーを冷たい目で見た。

「ミリー、ゾージャの侍女はコドニラじゃないの？」

ミリーは、ぱつと立ち上がった。

「すみません、わたしやりぎました」

ミリーは驚くほど気を使うのだ。

「コドニラは気が利かないし。ナキータさまではお手伝いは無理かと思って。私がやりました。でも、やりすぎでした。申し訳ありませんでした」

「いえ、そういう意味で言ったんじゃないの。ただ、コドニラはなにしていると思って」

「申し訳ありませんでした」

ミリーは深く頭を下げる。

「今後、あのような、でしゃばったまねは決していたしません。すみませんでした」

「いえ、そうじゃないんだけど」

ミリーは固くなつて顔を伏せて立っている。

自分はどうかしている。ミリーはなににも悪くないのに、怒るなら気が利かないコドニラを怒るべきなのだ。

「ミリー、ごめんなさい。私にも出来ないもんだから自分がふがなくて。それでいい」

「いえ、ナキータ様のお気持ちも考えないで、悪かったと思っています。お許してください」

それでもミリーへの嫉妬はおさまらなかった。なにか変だ、ナキータが自分の感情の中に入ってきている。

ゾージャが帰ってきた。

普段着に着替える。

ミリーが普段着を持ってきて、今度はナキータに渡した。さっきのはそういう意味ではなかったのだが。

しかたないので、今井が着替えを手伝う。ミリーはナキータを補佐してくれるが何をどうしたらいいのかわからない。どたばたしながら普段着に着替えた。

ゾージャがナキータの耳元で

「なにかあつたのか？」

「いえ、べつに」

着替えが終わった。

ゾージャは椅子に座った。

「で、お呼び出しは、何だったんです？」

ゾージャはうれしそうだ。

「ナキータ、お前の噂がゴルガ様のところまで届いていてな、話を聞きたいそうだ」

「何の噂です？」

「もちろん法力使いと戦って勝った話だ」

ゾージャが言いふらしているのか、この噂かなり広がっているらしい。

「ゴルガ様の所へ行くんですか」

「あす、来て欲しいそうだ」

次の日。ゾージャとナキータ、ニリーの3人はゴルガの屋敷に行った。

ゴルガの屋敷はゾージャの屋敷など比べ物ならなくくらいに大きかった。山の中腹を削り取って平地にしてそこに幾つものお屋敷が建っていた。巨大な門や玄関前の広大なテラスなど、ここに来る者を圧倒する。屋根の瓦、建物の柱、壁の板に打ってある釘、どれを見てもビツクリするくらい大きくて立派だ。中の廊下は広く、大勢の妖怪が忙しそうに行き来している。開いた扉から見える部屋はこれまた広く立派で、豪華な家具が置いてあり、廊下には大きな壺や見上げるほど大きな石の飾りが置いてある。

ゴルガに合うのも大変だった。延々と色んな所を通り抜け、あちらこちらの部屋で待たされて、案内する担当の妖怪も数回入れ替わり、豪華な部屋に通されて、やっとゴルガに会うことができた。

ゴルガは太った中年の男で脂ぎった顔をしている。目は鋭くて怖い。

「お前がナキータか」

ゴルガは正面の一段高くなった所に座っている。

「はい」

今井は元気よく答えた。

「おお、かわいいのう。ゾージャは幸せものじゃな。記憶をなくしておるそうじゃのう。大変じゃな」

「ありがとうございます。なんとか暮らしております」

「ときに、ナキータ。そなたは法力使いと戦って勝ったそうじゃの」

「はい」

「おお、すばらしい。頼もしいかぎりじゃ。詳しく話してはくれぬか」

妖怪は法力にはかなわない。だから、ゴルガはなぜ法力に勝てたのかが知りたいのだ。理由は今井が法力を持っているからなのだが、これは言えない。だから、戦いの過程をそのまま説明した。

ゴルガは話を聞きながらうれしそうだ。

「実にすばらしい。ナキータそなたは天才じゃ。わが妖怪の救世主じゃ。で、なぜ勝てたと思う？」

「多分、私の推測では、私の魂を扱う妖力が強かったからだと思います。私のこの妖力は法力に封じられませんでした」

ゴルガは身体を乗り出した。

「素晴らしい。法力に封じられぬ妖力があるとは。われら妖怪が数千年苦しんできたことがこれで解決する」

妖怪には法力使用との積年の因縁があるみたいだ。それが妖怪の勝利の形で終わると思っている。

「ゾージャ。ナキータに我が家臣に戦い方を指導をさせてもらいたい」

ゴルガはゾージャに指示した。

ゾージャは頭をさげる・

「家臣が法力使用と戦えるようになったら、もう人間など恐れる必要はなくなる。ナキータ。さすればそなたも人間の魂など食い放題じゃ。すばらしいとは思わんか」

とんでもない話になってきた。

「これは素質が必要だと思われます。素質があるかどうかわかりません」

今井はあわてて、その計画は無理だと説明を始めた。ナキータが勝てたのは今井の法力があったからだ。

しかし、ゴルガはその言葉をさえぎった。

「法力使用のやりようはひどすぎる。今では妖怪世界にいても封印

される者がでておる。妖怪世界にいても安全ではなくなったのじゃ。しかも死ぬまで封印するのはひどすぎる。ナキータ、そなたが一番封印のひどさを知っておろうが。あまりにも残酷だ」

今井はナキータがいた穴を思い浮かべた。立つこともできないような小さな穴なのだ。そこに死ぬまで封印される。

「ゾージャ、そなたの俸禄を上げよう。500巻だ」

ゾージャが驚きの声を出した。彼を見ると目を丸くしている。

「はあ、有難うございます」

ゾージャは頭を下げた。

今井はまだ引き受けると言っていないのに。それに自分で自分ではなくてゾージャの俸禄が上がるんだ。

「ゾージャ、家臣の練習の計画を立案せい」

「はい、承知しました」

ゾージャはナキータの意向を無視して引き受けてしまう。

「あの、私はまだ引き受けるとは言って・・・」

今井は言いかけたが、ミリーが袖をグイと引っ張った。

「だめです」

ミリーが小さな声で言う。

食事をご馳走してもらえることになった。別の部屋に食事が準備してあった。

ゴルガが席が正面にあり。その左右に20人くらいの家臣が座る。2人は一番末席に座った。みんなゾージャより偉い家臣ばかりなのだ。

ゴルガが来るまで、しばらく待っていた。

法力にたいする戦いの訓練の教育は無理だ。だからこれは引き受けるべきじゃない。引き受けると出来なかったときにまずいことになる。だから断ろうとしたのに、それなのに、ゾージャが勝つてに話を決めてしまうなんて。

「ゾージャ、これは引き受けちゃだめよ」

「ゴリガ様に頼まれたら断れるわけないだろう」

「この件は私が一番よく知っているのよ、断ろうとしたのに」

「無理でもやらなくちゃ、俸禄500巻をもらったろ。すごいじゃないか」

「それは、ゾー ज्याの俸禄でしょ。私はどうなるのよ」

今井は不満でしようがない。

「同じことじゃないか」

「同じじゃないでしょう。あたしの功績なのよ」

「俺の禄が500巻になったら、君も贅沢できるじゃないか」

「あたしの禄が500巻になったら、ゾー ज्याにも贅沢させてあげるわ」

「君の言っていることはおかしいよ。そんな話、聞いたことがない」
「今、聞いているでしょ」

今井は次第に腹がたってきた。

「ナキータ様」

ミリーが割って入った。

「ナキータ様は人間の女性のような事をおしゃっているんですか？」

「人間の女性？」

「私もよく思うことがあるんですが、人間の女性は男性と同じだそうです。女性でも家臣になって俸禄をもらうことができるそうです。うらやましいと思います」

そうなのか、なんとなくわかった。女性差別があるのだ。女性は男性の付属物とみなされているのかもしれない。

今井はこの問題は妥協することにした。妖怪世界の女性差別問題に首をつこんでもしょうがない。

「ゾー ज्या、この教育は無理じゃないかと思う。素質が必要なの」

「それはあるだろうな、だから素質のあるやつを探せばいい」

「引き受けても結果を出せないと思う。だから、出来ないことを前提に話を進めて」

「大丈夫さ。500巻だよ。がんばれよ」

ゾージャは500巻の俸禄になにも見えなくなっているみたいだ。もし、出来なかった時の事を考えて欲しいんだが。

ゴルガが来て、食事になった。

偉い人の前なので、みんな緊張している。ゴルガは対法力戦部隊の構想について長い演説をしていた。

今井はお腹をすかして目の前のおいしそうな食事を眺めていた。

何人かが入れ替わり話をする。

そして、やっと食事になった。

酒が出され、場は賑やかになってきた。

しばらくすると先ほどの緊張はうそのようになり、みんな大いに盛り上がった。何人かはナキータの所へきて法力使いとの戦いの話を聞いていった。

「ナキータ、こっちへ来て酌でもせんか」

突然、ゴルガから声がかかった。

あわてて、今井はゾージャを見た。彼は顔を動かして行けと言う。酌なんてどうすればいいかまったく分からない。なんとかゾージャに断ってもらおうとゾージャの袖を引っ張ったが、彼は厳しい顔をしている。

仕方なくのろのろと立ち上がると、ゴルガの所へ行った。でもどうしていいかわからない。

世話係の家臣が椅子をゴルガの横に置いたので、そこに座った。

横にあったトックリを持ってゴルガの盃にお酒を注いだ。

「ナキータ、お前はかわいいなあ。ほれ、お前ものめ」

ゴルガはナキータに盃を持たせて、それに酒を注ぐ。そしてナキータの腰に手を回してきてグツと引き寄せた。

これはセクハラだ。手で押し戻そうとするがすごい力だ。助けを求めてゾージャを見た。しかし、ゾージャは黙っている。

ともかくやり過ぎしかない。今井はしかたなく注がれたお酒を飲んだ。

「うまいか？ほれ、もつとのめ」

ゴルガの手はだんだんに上がってきて胸の近くにきた。胸を触る。

「ゴルガ様ちよつと」

もがくが手を緩めない。ゾー ज्याを見たがゾー ज्याは下を向いていてこつちを見ようとしない。

さっきの俸禄のことといいこのセクハラといい頭にくる。思い切つて言ってみることにした。

「ゴルガ様、お願いがあります」

「なんだ」

「対法力戦の指導をしますから、私に禄をください」

ゴルガは大笑いをした。

「女に禄だと、おもしろいことを言うやつだ」

「禄をくれないのなら指導はお断りします」

一瞬、場が静になった。みんながギョツとしたようにナキータを見ている。言つてはいけない言葉だったのだろうか。

しかし、ここまで来たら後に下がれない。

「法力との戦い方を知っているのは私です。戦い方を知りたかったら私に禄を払ってください」

ゴルガの顔がみるみる険しくなった。

「わしに逆らうつもりか」

ゴルガが手を離れたので、今井はゴルガから離れた。

「禄を私にと言っているだけです」

「ふざけるな。女だからとやさしくすれば、のぼせやがつて」

ゴルガはナキータを睨みつける。そしてゾー ज्याに向かつて。

「ゾー ज्या、さっきの500巻は取り消しだ。いいか、対法力部隊を養成するんだ。出来上がったら500巻にしてやる」

やっぱり、報酬の話はゾー ज्याにする。

「ゾー ज्याにいくら払おうと払うまいと何の関係もないことです。この私に、禄を払わなかったら指導しません」

息が荒くなっていた。呼吸するのが苦しいくらいだった。

ゴルガはあぜんとしている。

「ゾージャ」

ゴルガはゾージャを怒鳴りつけた。

「はい」

ゾージャは飛び上がるように立った。

「お前の女房の指導はなつとらん。もっと、ものの道理を教えとけ」

「はい、わかりました」

「わかったら、帰れ」

ゴルガが言う

「さつさと帰れ」

ゴルガは癪癢をおこして怒鳴った。

食事は中止になり、そのまま帰ってきた。

ゾージャは機嫌が悪い。

「ナキータ。なんであんな事を言っただよ。気でも狂ったのか」

「指導するのは私なのよ、私が禄をもらうべきだわ」

「女は禄なんかももらえないの、わからないのかなあ」

「ゾージャも女は男の持ち物と思っているの」

今井はなぜか腹がたつ。

「だいたい、私がゴルガに捕まってピンチの時になぜ助けてくれないのよ」

「どうしようもないだろう、相手はゴルガだぞ」

「ゴルガに土下座でもなんでもしてやめてくれと頼んでくれてもいいはずよ」

「そんなこと出来るはずないだろう」

「どうしてよ」

彼の言っていることもわからないではない。しかし、どこかふがいないと感じる。だいたい自分の女房が他の男に触られているのに黙

っているなんて。

しかし、喧嘩してもはじまらない。それに自分はナキータじゃないのだからこの喧嘩はどこかおかしい。

「頭を冷やして、あした話し合いましょう」

「そうだな、俺は明日謝りに行ってくる」

「そうね、その方がいいかも」

「その時は指導するって約束してもいいか」

仕方ないだろう。無理言ってもここの習慣は変えられるはずはないのだ。

「いいわ。ただ、本当にこれは指導は無理なの。だから結果がでないかもしれないって念を押してね」

今井は自分の部屋に戻って来た。今日は大変な一日だった。

ミリーが入ってきた。

「お着替えを持ってきました」

ミリーは着替えをベツトに置くと。

「今日のナキータ様は本当に素晴らしかったと思います。私、胸のつかえが取れました。」

ナキータ様が自分に禄をよこせとおっしゃた時、私は感激しました。本当に感激です。ナキータ様はお強いんですね」

「ちよつと言い過ぎたと思っているの。ゾージャに迷惑をかけたかもしれない」

「そんなことはありません。あんなふうに言わないと女はいつまでもつても弱いままです」

「ミリー、ありがとう。あなたにそう言ってもらって、安心できるわ」

ミリーに着替えを手伝ってもらって布団に入った。

ゾージャと喧嘩するくらいにここに慣れた。でも、このままナキータになってしまうのじゃないかと思うと怖かった。

結局。ゾージャは出来上がったら増禄になることで、法力と戦う

部隊の養成をすることになった。

10・魂の移動術

次の日。マドラー드가やってきた。

彼は断つても断つてもやってくる、今井も根負けして彼を部屋の中に入れた。

彼は、ねずみがたくさん入った籠をテーブルに置いた。

「これだけねずみを捕まえるのは大変だった」

「どこで、捕まえてるの？」

「人間界。穀物倉庫の中にねずみがたくさんいるんだ」

マドラードはナキータのためのここまでしてくれるのだ。彼とどう付き合うか考えてしまう。

彼はナキータを楽しそうに見ている。

「今日の君は綺麗だ」

ナキータはこの前ゾージャに買ってもらった着物を着ていた。褒められて思わず微笑んでしまう。

「これ、新しく買ったの」

「よく似合ってる、君は何を着ても上手に着こなすね」

着こなしてなんかいない、ナキータは何を着ても似合うのだ。マドラードと話しているという楽しい。今井はすっかりゾージャが今家にいることを忘れていた。

突然、扉が開いてゾージャが入ってきた。彼とマドラードと目が合った。

ゾージャは驚愕の表情で二人を見ている。

マドラードが頻繁にくるので不用心になっていた。ついに見つかってしまった。大喧嘩になってしまう、決闘になるかもしれない。

ゾージャは凍りついたように二人を見ていたが、何を思ったのか、扉を締めて出ていった。

「ゾージャ」

今井はあわててゾージャの後を追った。なぜ、ゾージャが出てい

ったのか分からないが彼に謝らなくては。

「ゾージャ、誤解よ。なにもしていない」

ゾージャは足早に歩いて行く。

「ゾージャ、待って」

ゾージャの袖をつかんで懸命に引つ張った。彼に悪いことをした
という思いでいっぱいだった。

「ゾージャ、悪かったわ。あやまる」

「もう、いいよ、1人にしてくれ」

「ゾージャ、誤解よ、彼に魂の妖術を教えてもらっていただけ。ゾー
ジャが教えてくれないから」

彼は後ろを向いたまま立ち止まった。

「言わなかったけど、君はマドラードが好きなんだ。俺とはもう終
わっていた」

「マドラードから聞いたわ。詳しくはミリーから」

彼は悲しそうな目でナキータを見た。

「俺は、君が記憶をなくした事をいいことに、君を騙したんだ……
卑怯な男だ」

「マドラードは断ったわ。今のは、本当に妖術を教えてもらって
ただけ」

「断った？」

ゾージャが不思議そうな顔をしている。

「本当よ、だから、彼とはなんでもないの」

「それは、いけないよ。俺は君を騙していたんだ。本当は君は俺が
嫌いなんだ」

本当のナキータはそうだったのかもしれないが今井にはなぜかゾー
ジャが好きだった。いい奴だ。

「ゾージャ、好きだよ」

彼は戸惑っている。

「俺は君を自分のものにするために、君を騙すような男だぞ。そん
な奴が好きはずないだろう」

ゾージャには昔のナキータとの喧嘩の傷があるのだろう。事実が分かればナキータが自分を嫌いになると思っている。

「ゾージャ、自信を持って。私、ゾージャが好きよ」

自分はナキータではないのだから言い方が難しい。愛してるとは言えない。ただ、ゾージャとこれまでのような関係を続けていきたくった。

「ナキータ」

彼は目に涙をいっぱいにためている。嬉しそうだ。こぼれ落ちる涙を拭っていたが。ふと、彼はナキータの後ろを見た。誰かいるみたいだ。

振り向くと、マドラードがいた。

「立ち聞きするつもりはなかった。君がゾージャに殴られるんじゃないかと思って追ってきたんだ」

彼はゾージャにちよつと会釈すると、廊下を帰っていく。

今井は彼の後ろ姿を見送っていた。自分が優柔不断なために彼にも迷惑をかけた。彼を気持ちを利用して彼を都合のいいように使ってしまった。俺ってひどい悪女だ。

数日がたった、

今井は自分の体の様子を見に行くことにした。できれば攻撃してきた相手の事も知れたかった。

人間の女の服に着替えた。

スカートをはくのは女装をしているようでドキどきする。着替えが終わると鏡を見た。スカート姿もいい。ナキータは何を着ても似合う。

外は珍しく曇っていた。ここは晴れている日が多いのだ。

病院へ着くと病室へ行った。

相変わらず同じ状態だった。自分の身体はチューブを鼻に通して眠っている。

自分の身体の横にすわって眠っている自分を見た。少し痩せたよ

うにも見える。床擦れなどは大丈夫なのだろうか。

「その人、相変わらずだねえ」

隣のベットの沖田さんが声をかけた。

「そうですねえ」

まずは気のない返事をした。しかし、先日の法力使いとの戦いの状況が知りたい。それとなく法力使いにの話にもっていった。

「そうだ、ナキータ退治作戦はどうでした？」

「ナキータは思いのほか手強い妖怪じゃ。返り討ちにあつた」

「えっ」

驚いたふりをする。

「一人殺られた」

「ええ、殺られたって、死んだんですか？」

「いや。ただ。左足が動かなくなつてな。今入院中だ」

「左足が？」

よかつた。死んでいなかったんだ。でも魂を一部食べると体の一部が動かなくなるらしい。

「今度はもつと大勢で攻撃をかける計画じゃ。今、人を集めている一瞬、魂の味を思い出した。攻撃を受ければまた魂が食えるかもしれない。そんな思いが頭をよぎる。恐ろしい考えだ。あわつてその思いを吹き払つた。」

「そこまでして殺らなければならぬんですか？」

「絶対にナキータは封印する。あいつは許せんのだじゃ」

ナキータはよほど恨まれてるらしい。

「いつまで封印するんですか？」

「もちろん死ぬまでじゃよ」

「死ぬまで、なぜすぐに殺さないんですか？」

「妖怪を殺しても、その死体から新しい妖怪が出てくるんじゃ。封印して妖力を全部使いきらせると妖怪は消滅してしまう」

「そうなんですか。でもそれって残酷じゃないですか」

沖田はわらつた。

「妖怪じゃぞ。残酷なことがあるもんか」

今井はあの狭い穴に死ぬまで閉じ込められると思った時の恐怖を思い出した。

「妖怪だつてかわいそうです」

「人間を殺してその魂を食べるような奴じゃぞ。あんたの彼氏だつてそいつに殺られたんだ。それなのにかわいそうだと思つのかね」
ナキータだつて悪気があるわけじゃない。魂がこんなにおいしいんなら我慢できないのも無理はない。今井は思わずそう考えてしまった。

「残酷な殺し方には反対です」

「どこが残酷なんじゃ」

「あんな狭い穴の中で過ごさなきゃいけないんですよ」

「妖怪が苦しむことはない。自然に消えるように消滅するだけだ」
勝手な考え方だ。妖怪の事を知らないからそんなことが言えるのだ。

自分は人間の味方なのか妖怪の味方なのか分からなくなった。今、妖怪と人間が戦争を始めたらどちらにつくだろう。人間につくと言える自信はなかった。

その日の夜。今井はベットの上で横になって眠ろうとしていた。すると、指先がぴりぴりする。法力の攻撃だ。

今井は緊張した。大丈夫だとは思つが、今度は相手だつて今井の反撃を防ぐ方法を考えたはずだ。

すぐに戦闘体制に入る。精神を集中し法力を遡つて相手の様子を探る。

法力を使つた戦いはこれで3回目だ。法力の使い方は格段に上達していた。自由に法力を使うことができる。簡単に相手の様子がつかめた。相手は30人くらいいる。それが同時に法力で攻撃をかけてきていた。躊躇していたら封印されてしまつか今すぐ殺される。全力で戦わなければならない。相手を殺すかもしれないが止む得な

い。が、内心は魂を食べる口実ができた事を喜んでいた。

すぐに相手の魂を探った。相手は何も対策を講じてなく簡単に魂に触れた。すぐに吸い出す。たくさんの魂が吸い出されてきた。口の中に甘い味が広がる。えもいわれぬ恍惚感。ここまでおいしいとは。人間の魂が胃の中に入っていく。今井は我を忘れ魂を食べるのに夢中になってしまった。

突然、法力使いと繋がっていた法力の回路が切れた。

魂も来なくなり、今井は魂が食べれなくなった。やっと正気に戻った。

方法は分からないが、ナキータに逆襲されたら法力の回路を遮断する準備をしていたのだろう。それで切れてしまったのだ。

正気に戻ると、急に自分が恐ろしくなった、今度は自分ではやめられなかった。もし、回路が切られなかったら全部食べてしまっただろう、30人殺すところだった。

魂を食べ始めると自分じゃなくなり、ナキータの本性に取り付かれてしまう。

自分が止められなくなりそうだと、魂 食べたさに人間を襲うかもしれない。

しかも、人間の法力使いもナキータにかなわない、法力が使えるから妖怪もかなわない、誰も手出しできない化け物が出来かかっているのかもしれない。

次は間違いなく相手を殺すだろう、これ以上魂を食べてはいけない、食べる度に化け物になっていく。

法力使いに会って話がしたかった、今井はもう魂を食べるつもりはないのだから話せばわかってくれるかもしれない、でもどうやって会つか、沖田さんでは自分の体が心配なので危険な話は持ち込めない。

ふと、法力使いに会う方法を思いついた。会えるかもしれない。

次の日。今井は人間界に向かった。今日はナキータとして人間に

会うつもりだから妖怪とわかるように妖怪の着物をきた。

人間界に着くと携帯電話のスイッチを入れてニュースのサイトを見てみた。『宗教的儀式の最中に集団麻痺』の見出しがあった。これだ。30人も麻痺がおこって病院に運ばれたらニュースになるはずだ。

記事では死者はいないらしい。とりあえず安心する。搬送された病院が書いてあったので、そこへ行ってみた。病院の前は取材の車やパトカーが駐まっている。受付で病室を聞いても教えてくれなかった、しかし、記者や警察が出入りしている病室を探せばいい。

それらしい病室があった。明らかに警察と思えるような険しい顔をした人が数人病室から出ていった。その病室に入ってみた。

6人部屋なので誰が法力使いか分からない。しかし、法力使いなら今ナキータが着ている着物が妖怪の着物だとわかるはずだ。ぐるっと見回した。一人の男と目があった。彼はナキータを見て驚いている。

今井はその男のベットの横に行った。彼は恐怖の目でナキータを見つめベットの端へ逃げるようにもがいている。

「ナキータです」

今井は言った。

彼は口をぱくぱくしているが言葉にならない。

「話し合いにきました」

「殺さないで」

彼はかすれた声でやっと言った。

「そちらが何もしなければ、私も何もしません。法力使いの方ですか？」

彼はかすかにうなずいた。

「怖がらないでください。私は何もしません」

ナキータがそんなに怖いんだろうか。彼女はどんな悪行を働いたのだろう。

「あなたは、法力使いの中で責任ある立場に人ですか？」

「いや。私は、応援を頼まれたただけだ」

できれば責任者と話したいが、意向を伝えるだけなら彼でもいいだろう。

「では、責任者に伝えていただきたいのですが、休戦を申し入れます。私は今後人間を襲いません。そちらも私を攻撃しない。この条件で休戦しませんか」

彼はナキータを見つめている。少し落ち着いたようだ。

「休戦ですか？」

「そうです」

「しかし。あなたが、人間を襲わないという保証がない」

「休戦だから、そのような保証はありません。どちらかが約束を破れば再び戦いになるだけです」

「なぜ、休戦したいんです？」

「私はもう人間の魂は食べないと誓ったんです。でもこれ以上食べたらその誓いを守れそうにないんです」

彼にどんな風に話すか考えた。少し脅す方がいい。

「もう誰もわたしを止めることができません。止めているのは唯一わたしの理性だけです。でも、これ以上、魂を食べるとその理性が崩壊しそうですね。わたしの理性が崩壊したら、わたしは殺戮の限りを尽くすでしょう。それが怖いんです」

彼は落ち着いて話を聞いていた。しっかりした人らしい。

「妖怪とこうやって話せるなんて思っていました。ましてナキータと・・いやナキータさんと話すことがあるなんて夢にも思いませんでした。わかりました。伝えておきます」

「あした。結果を聞きにここへきます」

わかってくれたみたいだ。これで、法力使いとの戦いはなくなるだろう、一安心だ。

今井は人目につかないところから青空に向かって飛び出した。

次の日、今井は休戦の確認に人間界へ行った。

病院に着いたが、警察の車がたくさん来ている、廊下を病室へ向かったが人が誰も歩いていない、異様な緊張があった。

畏なのかもしれない、そう思ったが、しかし、昨日のあの人は妖怪と話し合いができる事がわかったはずだ、待ち伏せなどしているはずがない、少なくとも話だけは聞いてくれるはずだ、そう思って廊下を進んだ。

昨日の病室の前まで来た。突然身体に糸が絡みついてきた、法力の攻撃だ。やっぱり待ち伏せだったのだ、そんな卑怯な。

今井はその場に座った、精神を集中する、だが距離が近いせいか法力の攻撃は強かった、糸が急激に絡みついてくる、あつと言う間に息ができなくなった。

今井は懸命に相手の魂をさぐった、しかし、頑強にガードしていて魂に触れない。

負けるかもしれない、あの狭い穴が一瞬脳裏をよぎった。

恐怖を感じたら精神力の戦いは負けだ。今井はそんな考えを振り払い魂を吸うことに集中した。魂を食べれるとの思いが体の中から何かを引き出した、強力な妖力が魂を吸い始めた、彼らのガードは簡単に壊れ、魂が吸い出されてきた。魂の味が口の中に広がる、ものすごい恍惚感が今井を襲った、今井は完全に自制を失い魂をむさぼり食う。

突然、頭を殴られ廊下に転がった。魂を食べるのは中断されてしまった。

見上げると、モップ棒を構えた男が目の前に立っていた。精神を集中するため目をつぶっていたので男に気がつかなかったのだ。

「この野郎」

今井は魂を食べるのを中断され激しい怒りがこみ上げてきた、こいつの魂を食ってやる。魂を吸おうとしたが思うように精神が集中できない。もう一発モップ棒で殴られた。

今井は立ち上がろうとしたが、体がしびれて思うように動かない。さっきの法力の攻撃で思ったよりダメージを受けているのだ。ま

ずい、今、法力使いの新手が来たら対抗できない、すぐに逃げなければあぶない。

今井はよろよると立ち上がった、モップの男がこれ以上追ってこないように睨みつける。

モップ男から離れて窓を開けた。空を飛ぶのも難しそうだった、しかし飛べなかったら終わりだ。

渾身の力を集中して宙に浮いた、窓から外へ出て、よろよると飛んで逃げた。

モップ男の魂が食えなかったことが腹立たしかった、誰でもいい、力を回復したら食ってやる。

ともかく安全な場所で休憩しなくては、今井はそう思った。

今井は病院から離れた森の中で座って休憩していた。しびれも取れ体力も回復していた。

時間がたつたので魂を食べることへの呪縛はなくなっていた。

今回もあの男が殴ってくれたからよかったが、自分では自制できない、一旦魂を食べ始めたらもうやめられない、どのくらい魂を食べばやめられるのだろうか、まったくわからない。化け物が出来かっている。

11・献上

今井は元の体に魂を戻す事を考えていた。

魂を扱う妖術は難しい。まだ練習不足だった。しかも、自分の魂をナキータの体から出せるのかわからない。魂を移す相手なしに魂を出せば死んでしまうから一度もやったことがなかった。しかし、やってみるしかない。うまくだせなかったら、妖怪世界に戻って研究しなおせばいいだけだ。しくじって死ぬかもしれないが、いつまでも怖がってはいられない。

しかし、これではゾージャにきちんと別れを告げられない。いつ、うまくいくかわからないのでゾージャには何も話せないからだ。ナキータが急にいなくなるとゾージャは心配するだろなと思うと心が痛んだ。

ゾージャがゴルガの所から帰ってきた。呼び出されて行っていたのだ。

正装なので普段着に着替えなければならない。

ミリーが着替えをナキータに渡すので、しかたなく着替えを手伝った。

今では着物の着方を覚えたので着替えを手伝うことができる。今井のナキータはだんだんいい奥さんになっていく。

ゾージャは渋い顔をしている。ゴルガの所で何かあったらしい。夕食の時もゾージャは一言も喋らない。ほとんど何もたべずに考えている。今井は尋ねてみたがゾージャは返事を濁す。よほど困ったことがあったみたいだ。

やがて、彼は意を決したようにナキータを見た。そして、重い口を開いた。

「お前を・・・差し出せと言われた」

一瞬、意味がわからなかった。

「ゴルガに君を献上しなければならぬ」
まさか、そんなバカな。

「私を、品物みたいに差し出すってこと？」
ゾージャは力なく肩を落とした。
妖怪世界はそこまでひどいのか。

「そんな事って、普通にあることなの？」
彼は下を向いている。

「いやよ。絶対にいや」
これだけは受け入れられない。品物みたいにゴルガに渡されるなんて冗談じゃない。

「ゾージャ。いやよ。あたし絶対にいや」
彼は哀れな顔をしている。

「ゾージャはどうするつもり？」
何も言わない。

「どうするつもり。私を渡すつもり？」
しばらく返事を待ったが、ゾージャは虚ろな目をしたままだ。
「はつきりしてよ。どうするつもり？」

「どうしようもない」
ゾージャは小さな声でいった。
「断ったらどうなるの？」

今井はゾージャがはつきりしないのでいらいらしてきた。
「たぶん。殺される」

そこまで横暴なのか、無茶苦茶な社会だ。
「じゃあ、逃げたら」
「どこへ？」

この男。確かにぶがいない。私を愛しているだろう。だったら逃げようと言っべきだ。

「どこへでも。ゴルガの手の届かないところへ」
「生活はどうする」

今井はあきれてへたりこんでしまった。たぶんゴルガに渡されて

しまう。

でも、それは好都合でもあった。元の身体に戻るつもりだから、どうせゾージャと分かれなければならない。ゴルガの所からいなくなればゾージャがナキータの行方を心配することなくなる。

ゾージャはテーブルに突っ伏して動かない。たぶん泣いているのだろう。

自分の妻より生活の方が大事なのか。

しばらくゾージャのそばにいたが。立ち上がると自分の部屋に帰ってきた。

今井はこれからの計画を考えていた。

絶好の機会だ。ゴルガに献上されたらすぐに魂を戻してみよう。相手がゴルガならナキータが急にいなくなっても気の毒に思う必要はない。うまく戻せなかった時はゴルガの女になって何度もやってみればいいだけだ。考えてみればゾージャだって同じことだ。ここで生きていくためにゾージャの女になっているのだ。献上はいつ頃だろう。いよいよこのこともお別れだ。

ミリーが部屋に入ってきた。

「ナキータ様。お話は聞きました。本当にひどい話です。ナキータ様がお可愛そうです」

ミリーは目に涙を浮かべている。

彼女は本当にいい妖怪だ。心から心配してくれる。

「ゾージャ様は逃げようとは言ってくれないのですか？」

今井は首をふった。

「自分の妻より生活の方が大事みたい」

「なんということ。ゾージャ様がそうおっしゃったんですか」

今井はぶすつとしてうなずいた。

「ナキータ様」

ミリーが抱きついてきた。ミリーに同情されるのは悪い気持ちは

しない。

「ナキータ様がお気の毒です。逃げましょう。私お供します」

ミリーの方がよほど気骨がある。

しかし。今、逃げるとゾージャが居場所を知っていると疑われるだろう。彼には世話になったから、迷惑がかからないようにしなければと思った。

「逃げる、ゾージャが疑われるわ」

「そこまで、ゾージャ様のことを」

ミリーは泣き崩れた。

「ナキータ様。では、どうされるのですか？」

「ゴルガのところへ行く」

「それはいけません。あまりにお可哀想です」

「ゴルガの女になるわけじゃない。ゴルガの所へ行ってから逃げる」

「でも、ゴルガの所からは簡単には逃げられません」

監禁されるかもしれない。しかし、一時的に人間界まで行ければいいだけだ。

「大丈夫。逃げて見せる」

「私もお供します。私の命にかけてお逃しいたします」

ミリーはすごい事を言う。本気なんだろうか。

「ありがとう。でも、そこまでしないでいいわ」

「いえ、私がかならずお逃しいたします」

ミリーはまじめすぎるのだろう。しかし、このぶんだとミリーはゴルガの所へついてくる。それではミリーと別れる時にややこしいことになる。

「ミリー。ゴルガの所へは私一人でいくわ」

ミリーは驚いている。

「なぜですか？」

「ゴルガの所よ。しかもそこから逃げるのよ。危険だわ。あなたを巻き添えにはできない」

「そんな。私のことなど気になさらないください。逃げる時には

私の助けがいるはずです」

「あなたにも生活があるわ。私と来たらどうするつもり？」

自分は人間に戻るのだからいいが。ミリーは一人でゴルガに追われる身になってしまう。

「ナキータ様だって同じでしょう。私がお助けします」

ミリーは自分の信念を絶対に曲げようとはしない。連れていくしかなさそうだった。

ゾージャと少し話をしたかったが、彼は部屋にやってこない。こんな重大事を妻と話し合おうと思わないのか、今井は少し腹がたった。

次の日。食堂に行くとゾージャが昨日のテーブルの所で眠っていた。一晩中ここにいたらしい。

「ゾージャ、こんな所で寝ていると風ひくわよ」

ゾージャを揺り起こした。

彼はぐしゃぐしゃの顔をしている。

「逃げよう」

彼は突然そう言った。

今井は驚いた。計画が狂ってしまう。しかし、彼が一晩中考えて出した結論だろう。彼の気持ちを大事にしたかった。

「ありがとう。逃げてくれるの」

ナキータはにつこりわらった。

「西の国へ逃げよう。あそこならゴルガの力が及ばない」

ナキータはうなずいた。

しかし。今井は困っていた。

すぐにナキータはいなくなるのだ。ゾージャにナキータのために人生を棒にふるせるのも可哀想だ。

「ゾージャ。ごめんね。ゾージャが築き上げた今の地位がダメになるね」

「そんなのかまわないよ」

「昨夜ね。私は私で決心したの。もし、私がゴルガの所へ行けばゾージャが今まで通りの暮らしができるなら、私はそれでいいよ」

「そんなことさせないよ」

「わたしね。ゴルガの所に行ってもかまわない」

後ろからすすり泣く声がした。振り向くとミリーが立っていた。いつの間にか彼女が来ていたのだ。ミリーは完全に誤解したみたいだ。

「君にそんなことはさせられない。一緒に逃げよう」

ゾージャは真剣だ。彼も覚悟を決めたらしい。自分の愛する女性を他人に差し出すなど出来ないとわかったみたいだ。

しかし、これではゾージャの人生が台無しになる。もう、本当のことを言うしかない。ナキータはすでにいい事を説明して逃避行をやめさせなければならない。

今井は朝食を食べながら、どう言うか考えていた。ナキータが既に死んでいることを知った時のゾージャの反応が心配だ。たぶん荒れ狂うだろう。彼と戦うことになるかもしれない。法力を使えるので負けることはないだろうがかなり面倒だ。ミリーの反応も気になる。ナキータにあれだけ忠実なのだから命がけで向かってくるだろう。

ゾージャの事をいろいろ言っただが自分もいざとなったら、なかなか言い出せない、朝食が終わったら話そう。

朝食が終わって居間のソファに二人で座った。

「ゾージャ・・・」と言いだしかかった時に。

「ナキータ」

とゾージャが言い出した。

「さっきの話だけど、君はゴルガの所に行っただけかまわないのか？」

ゾージャは決心が鈍っているのだ。

ナキータは黙ってうなずいた。

「現実的に考えて、逃げたらどうしていいか見当もつかないんだ。

生きて行けないかもしれない」

「逃げたら、ゴルガからも逃げなきゃならない」

「そうだ、絶対に刺客が追ってくる」

「だから、私、決心したの。私が行けばすべてうまく収まるんだって」

「ゴルガだぞ、いいのか」

「かまわないわ」

彼は必死でナキータを見つめている。

「すまない、本当に申し訳ない」

彼は床に土下座して頭を下げた。

確かにゾー ज्याの言う通りかもしれない。このような事が現実には我が身に降りかかった時、すべてを捨てて逃げるのが本当に出来るだろうか。

「ゾー ज्या、気にしないで、私は大丈夫よ」

「すまない、俺がふがいなくて」

ナキータはゾー ज्याを抱きしめた。彼の罪悪感を少しでも減らしてやりたかった。

ゴルガへの献上は明日になるとのことだった。

12・売り飛ばされる

その日の昼すぎにゴルガの所から使者が来た。

ナキータの荷物を運ぶと言う。必要最小限の品々しか持っていないとの説明だ。ミリーが品物を選んでくれている。

使者の中にマドラードがいた。彼はナキータが人から離れたのを見計らかってやってきた。

「ひどい事になったな」

今井は黙っていた。

「ゾージャと逃げるのか？」

ゴルガの使者にそんな事が言えるはずがない、黙っていた。

「ゾージャには逃げる度胸なんかないな。ゴルガの所へ行ってくれと頼まれたんだろう」

ゾージャを非難して自分を売り込む魂胆だ。今井は彼を避けて歩き出した。しかし、マドラードはついてくる。

「俺と逃げないか。俺はどこへ行ってもやっていける自信がある。

君に惨めな生活はさせない」

今井はいらいらしてきた。

「マドラード、私たちは終わりにしましょって、この前言ったはずよ」

「君がそこまでゾージャにつくすとは意外だな。君はゾージャに売り飛ばされるんだぞ」

「売り飛ばす？」

「そうか、ゾージャが話してるはずないな。君をゴルガに献上すると500巻の増禄になるんだ」

これにはさすがの今井もショックだった。

「ゾージャはその増禄を断らなかつたの？」

「あいつが断るもんか、大喜びだよ」

これが本当ならゾージャはとんでもない奴だ。増禄は自分の妻を

売ると同じじゃないか。確かめる必要がある。

今井はゾー ज्याを探して歩き始めた。マドラードはついてこなかった。

ゾー ज्याはいたが、ミリーがゾー ज्याを怒鳴っている。

ゾー ज्याは椅子に座ってうなだれていて、ミリーはゾー ज्याの前に立って金切り声上げてゾー ज्याを罵っていた。

「ミリー、どうしたの？」

「ゾー ज्या様はやっぱりナキータ様を差し出すそうです。さっきは逃げるとおっしゃっていたのにです」

ミリーは泣きそうだ。

「ミリー、そういう話になったの」

「なぜですか、絶対にいけません」

「ミリー、仕方のないことなの」

今井はゾー ज्याを見た。

「ところで、ゾー ज्या、500巻の増禄になるってほんと？」

ゾー ज्याは顔を上げない。

「本当なの？」

彼は力なくうなずく。

「なぜ、断らなかったの？」

彼は顔を上げた。

「わかった、断る」

もう遅いだろう、その場で断らなきゃ意味がない。

「ナキータ様を渡して、ご自分は増禄になるんですか」

ミリーが金切り声を上げた。

ミリーはゾー ज्याを罵倒し始めた。

ゾー ज्याを罵倒するのはミリーに任せて、今井は一人になれる部屋を探した。

ゾー ज्याは何を考えているのだろう、それほどナキータを愛していたわけじゃなかったのか、それとも単純に物事がわからないだけ

なのかもしれない。

もし、これが本物のナキータだったらどう考えただろうか、もちろんマドリードと逃げるだろうな。

ゾージャのために気を使って損をした気分だ。

あしたゴルガの所へいく、ちょうどいい潮時かもしれない。

その日は、ばたばたと過ぎた。ゾージャとの最後の日なのにほとんど話さなかった。

夕食が終わるとゾージャは自分の部屋に戻って行ったが、今井はやはり気になった。お世話になったお礼が言いたかった。

ゾージャの部屋に行った。

「ゾージャ、入っていい」

ゾージャは本を読んでいた。ナキータは彼の横にすわった。

「ゾージャ、私は記憶を失ってから後のことしか知らないんだけど、ゾージャにはいろいろ教えてもらって、感謝しています」

ゾージャは色々してくれた。ゾージャに悔いが残らないようにしてあげたかった。

「ナキータ、すまなかった。禄をもらったのは間違いだった」

「もう、そんなことはいいわ」

「禄なんか欲しくなかったんだ。ただ禄をやると言われた時、断りにくかったんだ」

「わかるわ、もう気にしなくていいよ。まったく何とも思っていない」

「俺はバカだよな」

「今日はゾージャと最後の日よ」

計画がうまく行けば、もうゾージャと会うことはないだろう。

「記憶を失って、始めてここに連れてこられた時は怖かったわ」

「君はガチガチだった」

「始めて宙に浮けた時はうれしかったわ」

「あの時は楽しかった」

「鬼ごっこしたね」

ゾー ज्याの目に涙が浮かんだ。

「君を失いたくない」

ゾー ज्याが悪いわけじゃない、ただゴルガに逆らえないだけなのだ。

「これは運命なの、しかたのないことだわ」

「ナキータ」

彼はナキータを抱きしめた。

ナキータはゾー ज्याが納得がいくまで抱かれていた。

「ゾー ज्या、私はゾー ज्याだけのものよ」

ゾー ज्याは抱いた手にぐっと力を入れた、息ができないくらい強く抱きしめられた。

「私は、未来永劫ゾー ज्याだけのものよ」

しばらくナキータを抱きしめていたが、彼は手を離れた。

「ゾー ज्या、愛してる」

ナキータはゾー ज्याにキスをした。

二人だけの時をすごした。永遠とも思える時間が流れた。

ナキータは最後にもう一度キスをした。

「もう、会うことはないと思うわ」

ナキータは立ち上がった。そして部屋を出るため扉を開けた。

「あしたは忙しいから、ゆっくり話せないと思う、だから今言っとくね。」

「……さようなら」

扉を閉めるとゾー ज्याの部屋を後にした。

ゾー ज्या世話になった……これが俺からのプレゼントだ。

次の日。今井はミリーに晴れ着を着せてもらった。

ゴルガの所から輿が迎えにきていた。

時間になるとミリーと玄関に向かった。玄関の外のテラスには大勢のゴルガの家臣が立っている、その中を輿に向かって進む、輿の

前にはゾー ज्याがいた。

「さようなら」

ナキータは静かに言った。

「すまん、許してくれ」

「ゾー ज्याのせいじゃないわ、運命なの」

ナキータは輿に載った。屋根がある輿で、すだれからゾー ज्याが見えた。

「出発」

責任者が号令を出した。

輿がすうと飛び上がった。ゾー ज्याが小さくなっていく。

ゴルガの屋敷ではナキータの部屋だという所へ通された。

ここは、屋敷は大きいが、建物がたくさん建っているので、窓からは隣の建物しか見えない。景色としては最低だ。部屋の大きさ豪華さはゾー ज्याの家と比べ物にならない。

部屋数も多く、侍女も数人いた。

しかし、部屋には結界が張ってあった。監禁するつもりだ。

監禁されると困る。ここを抜け出して自分の体の所へ行けなくなる。しかし、逃げるとミリーがゴルガに追われることになる。

しかたない、ちよつと危険だが正々堂々と出て行くことにした。

ゴルガに戦いを挑むのだ。法力が使えるから多分勝てるだろう。妖怪は法力には勝てないはずだ。ゴルガを倒してここを出て行く。もし負けてもゴルガの女になればいいだけだ。

ゴルガがすぐにくるとのことと、椅子に座って待っていた。

部屋の端に衝立に隠れるようにして、鎖で繋がれたみすばらしい服装の男女が数人立っていた。なんでナキータの部屋に繋いであるんだろう、ここは牢獄と兼用になっているのだろうか。

しばらく待っているとゴルガがやってきた。家臣が数人ついて来ていた。

彼はゆったりした着物を着ていて、太った体を隠している。

「ナキータ、よくきたな」

ゴルガは、にたりと笑うと椅子にどかっと座った。

「ゾージャと引き離して悪かった。さぞ、怒っておるであろうな」

「もちろんです」

今井は立つたまま、ゴルガを睨みつけていた。

「まあ、座れ」

「いえ、このままで結構です」

彼はナキータを眺めている。

「わしは、お前のような女が大好きだ。かわいくて、頭がよくて、気が強い、しかも強いときている・・・」

「私は、あなたの女になるつもりはありません」

今井はゴルガの言葉を遮った。

「お前が簡単にわしの女になどなるはずがないと思つとるよ」

彼はナキータの体を上から下までゆっくりと見ている。

「だがな、お前をなんとしても手にいれるー。考えてみる、わしの所にいればなんでも思いのままじゃ。たとえば、魂の練習用に何人でも準備するぞ」

ゴルガは部屋の隅で鎖に繋いである男女を見た。

「こいつらは練習に使っていい。死んでしまったら、また次を準備する。ねずみより生きた妖怪の方が練習になるぞ」

ゴルガは恐ろしい奴だ、人の命をなんと思っているんだろう。たぶん、マドリードから聞いてそれで準備していたのだろう。

「部屋も、もつといい部屋を準備しよう、ここは景色が見えん。着物も欲しいだけ買ってい」

それでナキータのご機嫌を取っているつもりか。

「それでも、私を結界で閉じ込めておくんですね」

ゴルガは口を開けたまま、しばらくだまつた。

「そうか、まあ、お前が逃げると困るでなー。お前が逃げないと約束するなら、結界は外す」

いよいよゴルガに挑戦する。

「もつと簡単に私を手に入れる方法があります」

「ほう」

ゴルガは身を乗り出した。

「私と勝負をしてください。私と戦って、あなたが勝ったら、あなたの女になります。従順にお仕えいたします。しかし、もし、私が勝ったら、私を自由にしてください。私はここを出ていきます」

ゴルガはにやつとわらった。

「おもしろい。お前はたいした女だ。その条件受けた」

ゴルガは立ち上がった。

「このわしと戦って勝てると思っている所がかわいい」

今井はミリーを見た彼女は後ろにいる。ゴルガの攻撃をミリーの分まで防ぐのは無理だ。

「ミリー、横に避けていなさい」

ナキータは身構えた。しばらく緊張が続いた。ゴルガは先に手を出すつもりはないらしい。

今井から動いた。彼は精神を集中して法力の糸を送り出す。ゴルガが妖力を撃ってきた。妖力の盾で防ぐが、吹っ飛ばされた。しかし、転がりながらも法力は緩めない、糸をぐいぐい締め上げた。ゴルガが動かなくなった。体を屈めて耐えている。

今井はどんどん糸を送り出して締め上げた。ゴルガはその場に倒れた。

簡単に勝負はついた。妖怪は法力にはかなわないのだ。

ナキータは立ち上がると、ゆっくりとゴルガに向かって歩いた。

「ゴルガ、もう終わりか」

家臣がぼうぜんとナキータをみている。

ゴルガにとてかなわなれないと思わせなければならぬ。

「ふん、口ほどにもない。私が欲しいのだろう。もつとがんばったらどうだ」

ゴルガの横に立った。

「たわいのない。それで、この私が欲しいなどと」

今井はゴルガを縛っていた法力を解いた。ゴルガは体を起こし咳き込みながらナキータを見上げた。

「ゴルガ様、わたしの勝ちです。約束どおりここを出ていきます。よろしいですね」

ゴルガはぼうぜんとナキータを見上げている。

ナキータはミリーを見た。

「ミリー、ついて来なさい」

ゴルガが倒れたので結界は消えていた。ナキータは開いていた窓から外へ飛び出した。ミリーも後に続いた。

13・人間界へ

二人は近くの山の上で休憩した。

「ナキータ様はお強いんですね、感激しました」

今井はわらった。

「そうでもないよ」

「ゴルガの所に行っても大丈夫と最初から思ってたんですか？」
「まあね」

これで、妖怪世界には住む所がなくなった。食べるものも寝る所もない。今井は自分のアパートに戻るつもりだった。

「いよいよ、ミリーに本当の事を言わなければならない。一番よくしてくれたミリーに一番ひどい事を言うことになる。これだけナキータに忠実なのだから一騒動起こるだろう。ミリーを法力で縛らなければならぬかもしれない。」

その後のミリーの生活も心配だった。また、どこかで働き始めるだろうがその間寝る所もない。一番よくしてくれたミリーに一番ひどいことをしてしまった。

「ミリー、話したいことがあるの」

「なんですか？」

「落ち着いて最後まで聞いて欲しいの」
今井はすべてを話始めた。

しかし、意外なことにミリーは最後まで聞いてくれた。

「そうだったんですね。封印後のナキータ様の変わり様は変だと思っていました。それに、記憶がないのに人間の事には詳しくったり、すべて人間的な考えをされるのも不思議でした」

ミリーはまったく動じない。

「ミリー、あなた、腹をたてないの？」

「何にですか？」

「私がナキータを殺したのよ」

「あるじが殺されたのに、報復をしようしないのは、不実だとおっしゃるんですか？」

「いえ、まあ、そうね、あなたがかかってくると思っていたの」

「わたし、盲目的に忠実なんじゃありません。ナキータ様は確かにあるじですが、彼女に無条件に仕えるわけじゃありません」

「そうなのか、ミリーは賢いしっかりした妖怪だ。今までミリーは忠実だと思っていたがミリーのは忠誠じゃなくて正義感なのかもしれない。」

「わたし、あなたを誤解していた。こんなことならあなたにもっと早く話せばよかった」

ミリーは考えている。

「難しいですね。報復まではしませんが、お仕えすることは出来なかったと思います」

「使えてくれる必要はないわ。ここに来た時はどんなに心細かったか。あなたに相談していたら、きっと力になってくれたと思う」

ミリーは苦笑いをしている。

「それも難しいですね。相談されていたらゾージャ様に秘密にはできなかつたと思います」

「結局、今回のやり方が一番よかったてことね」

今井はミリーを見た。彼女のことが心配でならない。

「これから、どうする。私は人間界のわたしの家に戻るつもりなんだけど」

「よかつたら、わたしお供していいですか？」

よかつた。これでミリーが寝る場所も確保できた。

人間界の自分の家に戻ってきた。一ヶ月ぶりだ。鍵は自分の体を救急車で運んだ時に取り出して、ずっと持っていた。

玄関を開けると新聞がたくさん積もっていた。新聞を踏み分けながらミリーと一緒に部屋に入った。

ゾージャの家の広い部屋になれていたので、ずいぶんと狭く感じる。

ここはゾー ज्याの家のミリーの部屋よりも狭い。

ミリーが哀れなものを見るような目で今井を見る。

俺はこれでも会社では中堅で結構優秀な社員なんだ。給料も多い方だと思う。部屋が狭いのは日本に土地がないせいだ。

「ミリー、狭い部屋でごめん」

今井は話し方を男に戻した。今まで女で話していたので変な感じだ。

「いえ、今井様。そんなこと気にしていません」

ミリーは履物を履いたまま、上がってくる。

「ミリー、履物をそこで脱いで。日本では、部屋の中は裸足なんだ」

「今井様、話し方が変ですね」

「もう、男と分かったから、男に戻したんだ。変かな」

「かなり変です。元の話し方の方が好きです」

しかし、俺は男なのだからこちらの方が自然なんだが。

「この、話し方になれてくれ。この一ヶ月女のふりで大変だったんだ」

ミリーはテーブルの前に座った。妖怪の着物はドレスのように広がっているので、椅子に座るのも大変だ。ゾー ज्याの家の椅子はズいぶんと大きかったのだ。

「コーヒー入れてやるよ、飲んだことある？」

「いえ、人間の食べ物食べたこと、ありません」

「テレビ、見てみようか」

今井はテレビをつけた。

「これは、ぜったいすごいだろう。妖怪世界にはテレビがないんで暇つぶしに苦労したんだ」

「それは、羨ましい悩みですね」

今井がコーヒーの準備をしていると。

「あの、私がやります」

と、ミリーがくる。

「いいよ、君はお客だから、そこでテレビでもみてて」

「いえ、今井様にそんなことはさせられません」

「もう『様』はいいよ、今井と呼んで」

「でも、それはできません」

「もう主従関係じゃない、対等なんだから」

二人でコーヒを飲みながらテレビを見ていた。久しぶりの我が屋だ。

時刻はもう4時を回っていた、考えてみたら今日は昼ご飯も食べていない。

「飯でも食いに行こうか」

「人間の食べ物ですね、食べてみたいです」

窓を開けた。窓から出た方が早い。晴れ着を着ているので移動する度に何かを引っ掛ける。玄関まで行くのは大変だった。すうと窓から外にでた。

近くのレストランに行った。

ミリーは知的な美人だ、頭もいいし理想的な女性だ。男だとわかった今ミリーと一緒にいてくれるのはいままでと違う意味でうれしい。

「人間界に来たことある？」

「いえ、始めてです」

「人が多いだろう」

「人間界は男女同権なんですよ、いいですねえ」

「ここに住んだら」

「無理です」

「無理じゃないよ、俺が今まで妖怪の世界に住めたんだから君だってここに住めるよ」

「でも、一ヶ月でここに帰ってきたでしょう」

「ゴルガに献上騒ぎが起きたからだよ」

食事を始めた、ミリーは珍しそうに食べる。

「ナキータ様のこと、かなり前から怪しいなと思っていたんです。

手帳とか変な機械持ってあったでしょう、しかも肌身離さず持ってありました。ひょっとしたら人間かなと思っていました」

「そうなの、じゃあ、なぜ見逃してくれたの？」

「わかりません、ただ、新しいナキータ様の方がいいかなと思ったんです」

今井の話し方が変わったせいかミリーの対応も違う。ミリーがこんなにかわいいと思ったことはなかった。

「君がゴルガの所までついてきてうれしかった。命がけてナキータを守るつもりだったの？」

「ええ、今でも同じ気持ちです」

「今でも？」

「妖怪は主従関係なんです。あるじを守るのが従者の勤めです」

「じゃあ、俺を守ってくれるの？」

「はい」

思わずうれしくなる。

「まだ、元の体に戻る危険な仕事が残っています。それが終わるまでお仕えます」

「元の体に戻ったら、その後は？」

「そこまでです、わたしとナキータ様の主従関係はそこで終わります」

「俺との関係は？」

「ミリーはわらった。」

「ご自分でおっしゃたでしょ、対等だと」

食事が終わると、二人で少しあるいた。今井は晴れ着を着ているのでかなり目立つ、すれ違う人が振り返っている。

いい臭いがする。

「おいしそうな臭いだな」

「えっ、臭いですか」

「かなり、臭ってるよ」

この臭いが分らないはずないだろうと思うのだが、ミリーには

分からないらしい。

臭いが強くなった。みると1人のおいしそうな人間が買い物をしている。ぼちゃとして見るからにおいしそうだ。今井はその人間に見とれていた。

ハット我に返った。これは人間の魂の臭いなのだ。

いままで妖怪世界にいたから気がつかなかったが、ここは人間界、回りには人間がたくさんいる。

「ミリー、これは魂の臭いだ」

ミリーはビククリしている。

「まずいな、この臭い。がまんできなくなりそうだ」

何か焦燥感みたいなものがこみ上げてくる。

「ミリー、ナキータが魂を食べるのをやめられなかったのは彼女が悪いんじゃない。正気じゃなくなるんだ」

「ナキータ様も、悩んでいました。ただ、何もおっしゃらなかったのどうなるのかはわかりませんでした」

ナキータも同じだったのだ。彼女の身体にいとこの身体の本性に取り付かれてしまう。

「魂を戻そう。もう待てない」

「危険なんですよ」

「いつかはやらなきゃ」

二人は人気のないところへ行くと、夕暮れの空に向かって飛び出した。

病院に着いた。病室に入ると沖田さんが食事をしていた。

ナキータとミリーを見てビククリしている。

「あんた、その着物。それ、妖怪の着物じゃないか」

始めて着物姿で沖田さんに会う。

「あんた、まさか・・・」

今井はにっこり笑った。

「自己紹介していませんでしたね、ナキータです」

沖田は飛び上げるほどビックリした、茶碗がひっくり返る、彼はベツトの上であわてて身構えた。

「安心してください、何もいません。今までと同じです」

「あんたがナキータだったのか」

今井はうなづく。

「わしは、ここでナキータが来るのをずっと待っていたのに、あんたに気がつかんとは」

沖田さんは呆然としている。

「そうだ、頼まれたんだ。あんた、その人の魂を戻してやってくれんか」

「今からやります」

今井は自分の身体を見た。いよいよ、この体に戻る。

今井は自分の体の布団をはいでベツトに腰を下ろした。

自分の顔にナキータの顔を近づける。ナキータの体から魂を吐き出し始めた。魂はナキータの口から今井の口へ入っていく。魂が出ていくにつれて意識が薄くなって体の感覚がなくなってきた。やがて別の感覚がでてくる。目の前にナキータの顔が見えてきた。ナキータの口から自分の口へ魂が入ってくる。始めてじかにナキータを見た。かわいい顔をして晴れ着が似合っている。彼女は今井の上に崩れ落ちてきた。今井は彼女を抱きとめた。魂はどんどん今井の中へ入ってくる。あともう少しだ。今井はナキータを抱きしめた。しっかりとしっかりと抱きしめた。ナキータの口から魂の最後が細い糸になって出てきて、それで終わった。

ナキータの体が飛び散った。無数の小さな小さな星屑になって部屋いっぱいには舞い上がった。キラキラ光りながら消えていく、最後の一つが消えてしまった。

すべて終わった。

今井は体を起こしてみた。普通に動く。鼻からチューブを抜き出した。

ミリーを見た。

「うまくいったみたいですね」

「大丈夫みたいだ」

「わたし、ゾージャ様のところへ戻って、この事を報告します」
今井はうなずいた。

「それがいい」

ミリーは目で挨拶をした。そして病室を出て行くとする。
「ミリー」

今井は呼び止めた。彼女は振り向く。

「さようなら」

ミリーはにっこりわらった。

「さようなら・・・ナキータ様」

13：人間界へ（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございました。

物語として、おもしろい事を目指して書いています。まだまだですががんばりたいと思っています。（おもしろかったら評価を入れていただけると励みになります）

この話は、一旦ここで終わりにしましたが、いつか続きを書いてみようと思っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7696q/>

妖怪の妻になってしまった男

2011年3月4日14時55分発行